

## 漢字集合論の試み - 日本文、常用漢字の場合を中心に -

著者	鹿島 英一
雑誌名	東北大学言語学論集
号	4
ページ	23-56
発行年	1995-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/00129552">http://hdl.handle.net/10097/00129552</a>

## 漢字集合論の試み

——日本文、常用漢字の場合を中心に——

鹿島 英一

キーワード：漢字の集合 常用漢字 文字単位 定量分析

### 一. 序 論

「漢字はラテン文字やキリール文字などとは全く別のものである。」というのが日頃、漢字を使っている者の漠然とした実感であろう。無論、ラテン文字の側にアラビア文字やブラーフミー（インド）系の文字などを、また漢字の側には契丹や西夏などの文字を加えることもできる。では、何故そう感じるのかということだが、こういう際によく引合いに出されるのは、「表意」か「表音」かといった＜文字の基本的な性格＞や「文字の順序」（ラテン文字なら a b c …）か「部首や画数」かといった＜辞書での語彙の検索方法＞などである。だが、これらはどれも強い説得力を欠ききらいがある。というのは、実際には表意と表音の中間的な性格のものが少なくなく、検字法も今では両者を併用する漢字辞典<sup>(1)</sup>が普通に存在するからである。

では、他に原因は無いのだろうか。私見では、「漢字は一体、文字なのか文字集団なのか。」「（もし文字集団なら）一体、個々の漢字は幾つくらいの構成要素からなるのか。また、その構成要素の種類は漢字全体ではどのくらいあるのか。」といったことと関係がある。言い換えれば、「漢字の特徴とは、一体何なのか。」という些か漠然とした問いにもっと明瞭に答えるには、漢字をラテン文字などと一緒にして議論しようとする姿勢や、漢字の分析に定量的な視点を鮮明に持ち込むという、二つのことが不可欠だということである。筆者は、以前この「古くて新しい問題」を第一の観点から考えたことがある<sup>(2)</sup>。その結果、漢字や漢字系文字の理解に幾許かの新たな視点が開かれたように思う。主に、（漢字の字源や変遷史に疎い）多数の現在の常用者の視点を通してである。だが、同時にそれだけでは、この「漢字の特徴とは何か。」という疑問が十分に解消しなかったのも事実である。

それで、次の手段として今度は漢字を定量的に分析してみようということになった。第二の観点の導入である。そして、その最初の試みが本稿である。具体的には、文字集団とも言うべき存在である個々の漢字は一体、幾つの構成要素からなっているのか調査することを大きな狙いの一つとしている。ただし、それについては今回は現行の漢字、中でも日本文を対象を絞る。（漢語の簡体字や繁体字での調査などについては別の機会に譲る。）多数の常用者の視点を重視するという稿の方針と適合する上、利用できる情報が多いためである。また、特に明記の無

い限り，[ ] 内は文字（字形），また（ひらがな）は原則として部首の日本式通称名とする。

## 二．漢字の集合

ラテン・アルファベットは26字だが，アラビア文字なら28，タミール文字なら247というのがよく言われる文字数である。無論，数え方や歴史的な事情によって多少の違いは出ても<sup>(3)</sup>，概ねこの前後に落ち着くというのが一般的な認識である。では，漢字の数は幾つであろうか。例えば，現行の日本語では当用漢字に人名用を加えた2000字程度が一応の目安だが，普通の小型の漢和辞典には7300もの漢字が収録されているのが現実である<sup>(4)</sup>。では，現代漢文の方はどうだろうか。日本語よりは遥かに多いというのが漠然とした印象である。多分，極く普通の文章の中で日本人に馴染みの無い字によく出会うためである。そこで，常用辞書の一つを見ると確かに8000近い漢字が収録されている<sup>(5)</sup>。だが，実際の文に現われる文字（総数）の99%は2500弱の特定の文字に限られているとも言う<sup>(6)</sup>。このため，（異体字を除けば）漢字の数としては日・漢両文共に一応2000～2500（もう一段別の基準なら8000弱）を想定することができる。だが，一方で『大漢和辞典』（諸橋）の様に六万字にも及ぶ膨大な数の漢字が収録されている例もある。この数の開きはすぎまじいの一語に尽きる。こうなると，「漢字は一体，幾つあるのか。」という問い自体，あまり意味をなさないのではないかと思えてくる。そして，このことはまた，（日本人，漢人・華人，韓国・朝鮮人などの）漢字の常用者で，自信を持ってこの問いに答えられる人がほとんどいないことにも窺われる。

では，漢字はその（凡その）数をなぜ容易に確定できないのだろうか。同じ「文字」と呼ばれる，ローマ字を始めとする他の諸文字では割に容易にできるというのにである。考えられることは，文字の性質や機能が全く違うか，従来の名称の付け方に問題があるかの恐らくいずれかであろう。そして，筆者の見方は主として後者であり，同時にその要点は「漢字という文字集合には二つのレベルがある。」という表現に尽きていた<sup>(7)</sup>。そして，その「二つの（異なる）レベル」とは，(a)単体文字と(b)組合せ文字であって，筆者はそれぞれ<文字単位>と<文字>と呼んだ。即ち，

(a). 文字単位（例：[山][石][西]）

(b). 文字（例：[明][請][葉]）

<表 1>

また，そう呼んだのはローマ字などを意識したためで，具体的なその相手は(a)では英文の[a]や[z]の様な「文字単位」（が1個の文字），(b)では英文の[ng]やドイツ文の[sch]の様な（文字単位が複数個）の「文字」であった。

では，この見方に立てば漢字の字数（概数）は確定するのだろうか。現時点ではそれは不明である。だが，少なくとも先の様な形での疑問はほぼ解消する。というのは，語と字（=(a)+(b)の総数）の視覚的な区別の曖昧な漢字にあっては，問題の件は「収録語数が辞書によって異

なっている。」というありふれた現象の記述と交替するからである。実際、社会科学院(1983)や方・傳(1947)といった辞書には語数の記述があるだけで、字数は記されていない<sup>(8)</sup>。

そういうわけで、漢字の数についての先の疑問は一応かたづいた。だが、まだ半分残っている。即ち、「文字単位」か「文字」のいずれか一方なら概数は確定するのだろうか。だが、少なくとも「文字」については見込みが小さいと言わざるを得ない。というのも、(集合として必ずしも一致するわけではないが)概略的には「文字」に当たると見做せる形声や会意は、あの大きな幅のある概数を示す漢字全体の大半を占めているからである。そこで、本稿では「文字単位」に的を絞ることにする。始めに、漢字の文字単位の持つ具体的な諸相について簡単に見よう。結果として、文字単位という概念が漢字でも実質を伴ったものであることが確認される。

始めは、漢字の文字単位が担っている「情報量」についてである。例えば、[stone] (英文)と[石]と[ˈshi]<sup>(9)</sup> (漢語普通話ローマ字文)という同じ物を表す(情報を伝達する)三つの表記を考えてみよう。英文では[s]から[e]までの5単位で表現しているのに対し、漢語文では[s][h][i]と声調を示す[ˈ] (文字単位と見た場合)の4単位で表している。従って、この場合は英文の方が1文字単位が担っている平均的な情報量が何となく少ないと言えそうである。(これに関してはここではこれ以上取り上げない。)では、[石]と[ˈshi]ではどうだろうか。勿論、[石]が漢語普通話の文字として使われた場合、即ち両者が同じ言語である場合に限る。

さて、[石]は1文字単位である。この字形を更に小さい有意味な要素に分解できるというのは現在の常用者の一般的な認識ではない。一方、[ˈshi]は4単位であるから、この場合には1単位当りの平均情報量は漢字はローマ字の4倍となる。また、もし[晴] (右左で2単位)と[ˈqing] (5単位)なら違いは2倍半である。そして、この操作を沢山の対に施せば、漢語の場合には漢字の方がローマ字より圧縮された情報を担っていることはほぼ明らかとなる。

ところで、この(1文字単位当りの)平均情報量という概念は具体的にはどういうときに表面に出てくるのだろうか。私見では、それは文字改革や綴り字改革などと関係があるように思われる。例えば、繁体字の漢文で[圓] (3単位:くち,かい,くにがまえ)と書く貨幣単位は簡体字では[元] (1単位ないし[二]と[儿]の2単位)であり、英文の[through] (7単位)には[thru] (4単位)という競争相手が既に生まれている。両対共に文字単位数は減少し、1字形当りの情報量は増加している。だから、これを情報の伝達効率の改善だと解釈することは可能である。

では、文字単位相互間の類似(判別の難易)ということはどうなっているのだろうか。この面からも文字単位が実質を伴ったものかどうかの判断材料が出て来よう。例えば、我々は日本語で[購]と[講]や[動]と[働]を時として取り違える。ここまでの見方によれば、これは英文で[sit]と[sat]や[nit]と[night]を取り違えるようなものである<sup>(10)</sup>。その際、漢字常用者なら大抵は[貝]か[言]かに、また(にんべん)の有無に迷うのが常で、それ以外に

迷うことはまず無い。それは先の英文の対で [i] か [a] かに、また [gh] の有無に迷うのと大差が無いから、文字単位という概念は漢字でもやはり有効である。ただ、同時に話はその辺りで止めておく必要がある。というのは、[貝] と [言] などの対は一体 [i] と [a] の対よりも取り換え易いのか、或いは漢字の文字単位は平均して幾つの似た文字を持っているのか、といった様な（言ってみれば、程度の進んだ）疑問に現時点では簡単には答えられないからである。

### 三. 常用漢字の文字単位

#### 1. はじめに

ここからは漢字の文字単位を具体的に確定する方向へ向けて話を進めよう。さて、漢字の文字単位とは、要するに（漢字の変遷史などに疎い）漢字の現在の常用者の極めて多数が文を書いたり辞書で検字をしたりする際に、最小の単位として認識・記憶している字形のことであった。無論、何らかの定まった意味を連想させる機能を持っていることが原則である。では、具体的にはどうやって確定したらいいのだろうか。あるいは、それは現実にはどういう性質を持っているのかとも言い換えることができる。だが、いずれにしてもその鍵はやはり先ず伝統的なものの中に探すのが適当であろう。

さて、(「六書」での) 象形や指事が先ずその候補である。また、漢字の辞書での検字に際して使う部首も役に立つ。その際、それが形声文字の意符かそれに近いもの<sup>(11)</sup>なら尚好都合である。まあこの辺りが旧字体（繁体字）の基本であろう。（これらの条件の重なりが減るに従い、自己判断の余地が増す。）だが、もし日本の新字体や漢語の簡体字も対象とするなら他にも何か要るかもしれない。というのは、それらは出現してまだ日が浅いために、文献の記載内容を受け入れるに際して細かい配慮が要るからである。例えば、日本の新字体での部首の合併に関して、匚（はこがまえ）と匚（かくしがまえ）の対を、[隔][防]の部首（こざとへん）と[郭][邦]の部首（おおざと）の場合と比べてみよう。ほとんど迷うことの無い後者と違って、[匚]と[匚]の場合には（全面的ではないが）結局は自分で決定するしかなさそうである。

そんなわけで、具体的な作業に入る前に対象となる集合を選択しておく必要がある。ここでは、現行の日本文の漢字を取り上げる。だが、問題は字数（集合の要素数）である。これはある程度人為的に決めなければならない。この点はローマ字などとは違うところである。というのも、(ヨーロッパの語文にも [˘] [˘] [˘] 等の添付された文字が目につくから、字形については漢字と類似の状況にあるが) 字数についてはほとんどその必要はない。だが、漢字は二千字から（最大では）六万字という途方もない幅があるのである。そこで、諸般の事情を考慮して「常用漢字」<sup>(12)</sup>（本表：1945字）を対象に絞った。基準は基本的には使用頻度の高さである。

## 2. 「部首」の単位数

さて、日本文の常用漢字の文字単位集合の概容を確定する作業に入ろう。無論、文字単位の多くは漢字（漢和）辞典に於ける部首と一致する。そこで、部首を吟味することからこの作業を始めることにする。さて、＜赤塚，阿部1980＞には(1)260部ほどの項目<sup>(13)</sup>を網羅した部首索引と(2)140余部の部首の一覧表（周知の日本式名称付）がある。その内、(2)は字形全体に占める部首の位置から偏（左側），旁（右側），冠（上側），脚（下側），垂（上から下），構（周囲），遶（下周辺）の七種に大別される上，多くは文字の意味にも関係がある。要するに，「車」なら「くるま（意味）へん（位置）」の様に意味にも配慮されているのである。

では，この中から独自の意味を持つものを拾ってゆこう<sup>(14)</sup>。それが（単数か複数の）文字単位である。表2はその結果だが，皆概して特別な議論が要らないものである。尚，[ ]は省略した。（一覧表では以下も同様である。）

鼻，齒，麻，鳥，魚，鬼，髟，骨，馬，革，雨，門，長，金，麦，里，  
車，身，走，貝，豆，言，角，行，虫，舟，舌，耳，羽，缶，糸，米，  
竹，立，穴，石，矢，矛，目，皮，田，片，止，欠，木，月，日，方，  
斤，斗，支，戸，弓，山，子，女，土，口（くち），力，八，

＜表2＞<sup>(15)</sup>

補1) [缶]（ほとぎ）と[欠]（あくび）の単独の文字は，[罐]と[缺]の常用字体の方である。

補2) [舉]を例とする（よこめ）も[目]の異体字（部首）だが，常用漢字でない。

補3) [麦]と[麴]の様な，常用漢字形と旧字体とで異なる字形を持つ場合も含めた。

次に，[包][旬][旬]などに共通する[勹]（つつみがまえ）を例にして，もう少し馴染みの薄い部首を考えてみよう。確かに表2の文字よりは意味も曖昧である。第一，この字形が単独の漢字として存在するのかどうかにも自信が持てない向きが少なくない。だが，現実には辞書中にもあるし，臆気な意味を感じ取る使用者がそう極端に少ないわけでもなさそうである。従って，まだ検字用の単なる記号に転化しきっていないと見るのが適当であろう。すると，結局は単独の[勹]が常用漢字表に入っていないことが表2の文字との違いということになる。そこで，今度はこの方針に沿って類例を集めてみた。それが表3である。無論，結果的には意味や文字相互間の馴染みの違いは幾らか無視されることになった。

鬲（かなえ），頁（おおがい），韋（なめしがわ），隹（ふるとり），  
隶（れいづくり），阜（おか），采（のごめ），酉（ひよみのとり），邑（むら），  
彡（しんにゅう），豸（むじなへん），豕（いのこへん），虍（とらんむり），

艸（くさかんむり）、艮（こんづくり）、舛（まいあし）、聿（ふでづくり）、  
耒（らいすき）、禾（のぎへん）、夔（はつがしら）、𠂔（やまいだれ）、  
牙（きばへん）、𠂔（しょうへん）、气（きがまえ）、爰（ほこづくり）、  
𠂔（かばねへん）、戈（ほこづくり）、𠂔（ぎょうにんべん）、𠂔（さんづくり）、  
弋（しきがまえ）、爰（えんにょう）、𠂔（まだれ）、𠂔（いとがしら）、  
巾（はばへん）、尸（しかばねかんむり）、ㇿ（うかんむり）、爰（すいにょう）、  
口（くにがまえ）、𠂔（がんだれ）、𠂔（はこがまえ）、𠂔（つつみがまえ）、  
几（つくえ）、ㇿ（わかんむり）、几（ひとあし）、𠂔（ふきながし）、

<表3><sup>(16)</sup>

補1) 常用漢字の構成部分で、単独の文字とはかなり異なる字体を使用する場合。

[艸] 6画→3画：[草] など，[阜] 8画→3画：[防] など，

[邑] 7画→3画：[郡] など，[辵] 7画→3画（しんにゅう）：[道] など<sup>(17)</sup>，

補2) 常用漢字の構成部分で、単独の文字とは僅かに形の異なる字体を使用する場合。

[耒] 6画→6画：[耕] など，[章] 9画→10画：[偉] など，

[牙] 4画→5画：[邪] など，[舛] 6画→7画：[舞] など，

補3) [𠂔]（かくしがまえ）等は[𠂔]（はこがまえ）等に合併されたためここには無い。尚，合併後の旧字体の部首の取り扱い方針は（注21）に説明がある。

今度は、基本的に異体字形がある部首に話を移そう。やはり単独の字形が常用漢字表に入っているものからである。結果は表4に示す。尚，主として非単独字形で使う異体字形は／の後  
に例で示した。

食／飯など，足／踏など，衣／補など，肉／肝など，老／考など，羊／美など，  
示／礼など，玉／珠など，犬／狩など，牛／牧など，水／汁など／泰など，  
火／蒸など，手／打など，心／忙など／恭など，刀／刈など，人／化など／介など，

<表4><sup>(18)</sup>

次の表5は単独形が常用漢字表に入っていない点だけが表4と違うものである。

网／罪など／罕など／罔など，爪／爰など／爵など，无／既など，支／改など，  
亼／彙など，尢／尫など，卩／危など，𠂔／冬など，𠂔／彗など，

<表5><sup>(19)</sup>

補1) 非単独字形（異体字）を持った文字の中には常用漢字表に無いものもある<sup>(20)</sup>。

さて、以上は基本的には旧字体に立脚した伝統的な分類にも沿ったものであった。ここから

は常用漢字に特有なものを見てゆこう。最初は、[𠂔] (はこがまえ) と [𠂔] (かくしがまえ) の関係である。これは旧字体 (繁体字) で異なる範疇だったものが、(常用漢字では字形を区別しないために) 新字体で同一の部首となった例である。どう扱えばいいのだろうか。結論から言えば、やはり単独の文字単位と見做すのが適当であろう<sup>(21)</sup>。ただ、その場合にはこの合併された新しい部首は結果的に二つ (複数) の系統のイメージと関係を持つことになる。

ところで、これと似た対に [門] (とうがまえ) と [門] (もんがまえ), [日] (ひへん) と [日] (ひらび), [口] (くち) と [口] (くにがまえ), [阪] などの (こごとへん) と [邦] などの (おおごと), [処] などの (つくえ) と [風] などの (かぜかんむり), [肝] などの (にくづき) と [月] (つきへん) などがある。だが、この内合併しているのは<赤塚, 阿部1980>では、(つくえ) と (かぜかんむり) だけである。なぜだろうか。どうやら、合併の重要な判断基準は「使用者の抱いている意味の曖昧 (鮮明) さ」と密接な関係があるらしい。つまり、(a)字形が鮮明なイメージ (意味) をある程度失っていればいい、のではなかろうか。もしそうでなければ、常用漢字の字形では全く同じ (にくづき) と (つきへん) (例: [肝] と [服]) までも異なる部首に分類されている理由が見付け難いからである。

ただ、これらからは例えば、(b)例外となる字例が (極めて) 少ない場合には字形を重視する、といった様な別の基準も読み取れる。というのも、本来が [鄰] (おおごと) や [闘] (とうがまえ) であった [隣] や [闘] が (意味を軽視されて) (こごとへん) や (もんがまえ) に分類されているからである。そして、この見方は [玉] の部首と [王] や [手] の部首と [才] の合併に符合する<sup>(22)</sup>。尚、ついでに言えば、常用漢字に例字の全く無い [門] は [門] に合併させても差し支えないだろう<sup>(23)</sup>。

では、他にどんな基準があるのだろうか。その手掛りを探すために<赤塚, 阿部1980>で部首の項の説明や実態を見てみよう。ほぼ次の様に分類される。即ち、

- (1)意味に密接に関係した字形を中心にした文字集合 (例: [魚] [水])
- (2)字形面で似た諸文字が(1)に加わった文字集合。(例: [巾])
- (3)複数の(1)が合併した文字集合。(例: [𠂔] [尸] / [方])
- (4)字形面での同一・類似関係に主眼を置いて集めた文字集合。

#### <表 6>

この内、(1)は問題なく<漢字の文字単位>になり得るが、(4)はほとんど不可能である。さて、こうした記述を踏まえて、先ず部首 [巾] を見よう。無論、多くは [布] や [帆] などの「布の用途・製品」などを表す (字形を持つ) 文字だが、[市] (いち) や [帚] (ほうき) など含まれている。だが、そこに記された「巾 (という字形) を目印にして引きやすい文字を集めた」という説明は、それを純粋に字形 (図形) 面に重点を置いたと解する限りなかなか理解し難い面がある。特に、[帚] はその感が強い。そこで、<諸橋1960>を見ると、[市] には膝



掛という全く別の文字が融合しているかもしれないこと、[帚]の場合には曾ては布帛中心だった清掃が後に箒(＝帚)に変わったらしいことが分かる。要するに、以前の分類を今も引きずっているだけとも取れるのである。だが、一般にはどちらの説明が現在の漢字使用者に説得力を持つかと言えば、多分前者ではなかろうか。従って、[巾]の様な(2)の代表形は(過去の字形の相関の如何と関係なく)文字単位として採用していいように思われる。因みに、表3の[勺]はこの基準に依った。(尚、これは先の基準(b)と実質的には同じものである。)

次は、[尸](しかばねかんむり)である。これは、曾ては別々であった「人体・尻」と「屋根・履物」に関するものが合併した部首とのことである。実際、辞書の[尸]の項には[尻][尿]などの文字と[局][屋]などの文字が雑居している。多分、そのためであろう、現行のこの字形に([魚]や[金]からの様な)特定の明瞭な意味を感じることは難しい。だが、それでもまだ独立の文字単位と見ることは可能である。というのも、曾ては「屋根・履物」の字形は今とは幾分違っていたなどという説明を読めば、一応納得がいくからである。

さて、これと似たものに[攴](のまたかんむり)と[攴](すいしょう)、[族]や[旗]などに共通する(ふきながし)と[方](ほうへん)の対などがある。この内、前者は両字形とも意味が曖昧化していることもあって、(両字形を異体字形とする)単一の文字単位と見做すことは容易である。(尚、これは先の基準(a)と実質的には同じものである。)だが、[方]の方は少し議論が必要である。それは(ふきながし)が(ほうへん)に純粹に加筆される関係にある(ことと、(ふきながし)の意味の曖昧化がさほど進んでいない)ためである。では、どう見たらいいのだろうか。無論、決定的な根拠は無い。だが、互いに独立の部首となっている[長]と[髟](かみかんむり)の関係は充分参考になる<sup>(24)</sup>。従って、この例に倣えば現行の日本字としては[方]と(ふきながし)は分離してもいいように思う。

今度は、[亠](けいがしら)について考えてみよう。＜赤塚、阿部1980＞中の説明を読む限りでは、(2)と(3)の中間の印象を受ける。つまり、現行の日本の漢字を対象とする限り、この部首は((さんずい)や(したみず)などの多彩な異体字を有する[水]の類ではなく)[亠]と[𠂔][肅][帚]などに共通な字形とを無理に合併していると見做さざるを得ないのである。(そのため、この字形は表5に挙げておいた。)しかも、[巾]を90°回転した外観の字形の方は特定の意味とは繋がらない上、実際には[婦][尋]など(新体字)の[ヨ]も含んでいるのである。従って、本稿では両者を別の部首に分離しておいた、尚、もし[亠]の共通の意味が更に薄れれば、単に似た字形を集めただけの(4)に近づこう。

次に、常用漢字における[入]の部首の必要性について考えてみよう。無論、字例が少ないためである。さて、旧字体では[入]の分類だった[全]も、今では[人]の部首に移っているから、[内]もこれに倣うことができる。また、[今]や[会]などが(字形優先で)[人]に入るのなら、[兪]も入れられなくない。後は、単独字[入]の処理だが、それには[王]や[才]の文字を[玉]や[手]の部首に繰りこんだ手口が適用できる。結局は、[入]の部首は

無くても困らないものとなる。

今度は、[八]に話を移す。字例には、[兮][公][六][共][兵][其][具][典]などが並んでいて、(2)型の説明が付いている。だが、よく見ると、この部首の文字の多くは[八]とは意味の繋がりが無い。しかも、現代の漢字使用者の意識では[八]は数字の(はち)だから、実態はかなり(4)に近い。従って、文字の検索のために字形面を重視して作ったとの理解が強いこの部首を(本稿で言う)漢字の文字単位として採用すべきなのかどうかということが改めて問題となる。無論、[八]自体についてはそう認定することに強い違和感を持っているわけではない。だが、その有力な根拠が[八]という単独字形の漢字の馴染みの深さにある点に留意すれば、[一]や[十]のことなどを考慮せずに結論を出すことはできない。

では、単独の漢字が始めから無い[一](なべぶた)はどうだろうか。この場合は説明も(4)型だし、全く字形面から抽出した部首であるため、いい検字法や有効な漢字の記憶法ではあっても文字単位にはなり得ないと見るの適当であろう。つまり、[木]→[本]での[一](通称名も無い記号)と同類と見做すのである。

最後は部首[乙]である。無論、常用漢字[乙](おつ)がその代表だが、他に[九][乞][乾]や、(つりばり)を持った[也][乱][乳]がある。だが、意味面はもとより、字形面での関係もかなりまとまりを欠くから、(3)とは遠い<sup>(25)</sup>。それは、[九]と[乙]や[也]と[乱]の対を先入観無しに見れば(とても同じ図形を持った字形とは思えないから)納得がいこう。従って、この部首は表6の分類を敢えて使えば(4)であり、当然この部首を文字単位と認めることはできない。

ところで、表6の各項の表現には、「現実の部首では(量の多寡はともかく)異物が混じっているのが普通の姿だ。」という、共通の特徴が読み取れる。要するに、字源的には意味の繋がりの無い文字が大抵の部首に見られるのである。例えば、意味が水と繋がり難い[求]が[泰]と同じ(したみず)に属していたり、意符が[亼]から変わったために[艮]との意味関係が不明瞭な[艱]などがそうである。では、部首の直観的な理解と合わない、この現象の原因は何だろうか。どうやら、そのかなりの部分を略字・俗字と部首の(意外な)交替が占めているようである。例えば、[仙]はもと[僊]の俗字、[休]も音符であった[攸]の原字が誤って[木]に変わったのだという。もしそうなら[仙]や[休]に[山]や[木]の意味が無いのは当然な上、現在の使用者の一般的な意識と真向からぶつかっているわけである。(そのためか、辞書での分類では[山]や[木]の部首には入っていない。)従って、こういう場合には何文字単位と数えるかが問題となるが、本稿では(この例なら)人と木か山の2文字単位と数える方針を採る。

以上で、比較的問題の無い部首についての取り扱いを終わって、次の段階に進むことにする。だが、話も些か長くしかも多岐にわたったので、これからの方針の確認も兼ねて、ここまでの経過を簡単に整理してみようと思う。

さて、我々は新体字、特に常用漢字の文字単位を探して確定することを目指している。そこで、先ずはその対象を宝庫と見られる伝統的な部首に絞った。中でも、通称名のよく知られた140余部は議論の余地が少ないために、集合の概観や判別基準の概略を掴む上でとりわけ都合だと判断したのである。そして、その各々について特定の意味と繋がっているかどうかを見極め、同時に単なる検字のための手段に過ぎないものとを分ける基準作りも試みた。また、その際示した結果の一覧表の内、表2、表3と表4、表5は異体字の有無で、また表2、表4と表3、表5は部首の単独字形が常用漢字であるかないかで分けた。以上である。

さて、ここからは議論の余地の比較的増した百部余りを対象として同じ作業を続けるわけだが、そのための基準は表6の分類を使って再度確認すればこうなる。即ち、(1)を文字単位と見做すのは適切だが、(4)は不適切である。また、(2)と(3)は(1)と同じ範疇に属すと見做すことを基本方針とするが、微妙なものについては個別に決定する。その際、既に扱った例は当然以後の参考となり得る。

では、話を次に進めよう。先ず、[亀]（新字体）、[龠]は字例が1例なので部首に採用する必要が無い。次は、単独の字形が常用漢字のもので、これは表2と表4に対応する。表7はその結果である。

齊，鼓，黒，音，青，臣，辛，赤，谷，見，血，至，自，母，皿，白，生，甘，  
 玄，氏，比，文，干，己，工，小，寸，大，夕，土，又，  
 竜／襲など，川／巡など，  
 黄，高，香，首，飛，風，面，非，色，用，父，毛，

<表7>

補1) 最下段(黄，高，香，首，飛，風，面，非，色，用，父，毛)の各部首は皆，常用漢字は単独字体1例だけである。その内，[黄]は旧字体の字形と異なる。

補2) [竜]は[龍]の新字体だが，必ずしも単独字体専用ではない。例：[滝]

補3) [母]（はは）は[毎][毒]などの（なかれ）と，[氏]は[民]と，[己]は[巳]と合併。表6(3)に相当。

補4) [用]，[干]，[大]，[土]は表6(2)に相当。

補5) 常用漢字中では[臣]は7画。

補6) 三段目は表4に対応。

次の表8は単独の字形が常用漢字ではないもので，これは表3と表5に対応する。

鹿，辰，瓜，而，臼，而，疋，瓦，升，艸，卜，七，  
 鼎，鬯，韭，黽，鼠，睪，黍，鹵，肉，

<表8>

補1) 二段目(鼠, 黽, 黍, 鹵, 内; 鼎, 鬯, 韭, 菑)の部首には常用漢字が全く無い。また, ;の後方の4つは辞書中の字数も極めて少ない。尚, 表5に相当する例は無い。

補2) [臼](うす)は[興][臾]などの(きょく)と合併。表6(3)に相当。[瓦]は表6(3)の[尸]に類する。

補3) [疋](ひき), [艸](くさのめ), [卜](ぼく), [匕](ひ)は表6(2)に相当。

補4) 常用漢字中では, [瓜]は6画。

では, 先に見た[乙](おつ)に類するもの, 即ち表6(4)に属するものはどのくらいあるのだろうか。まず, 旧字体[攴][爽][爾][俎]などの[攴](こう)がそうだから常用漢字の部首から外す。また, [冂](けいがまえ), [凵](うけばこ), [厶](む), [曰](ひらび)は[乙]や[攴]より字形面での揺れは少ないが, 文字の整理(検字)を主目的とする典型的な表6(4)の例である。この他, 部首で漢字を探すときにしばしばもどかしさを感じる[亅](はねぼう), [ノ](の), [丶](てん), [丨](たてぼう)などは皆同類である。では, [十](じゅう)はどうだろうか。なにしろ, 単独形自体は非常に馴染みのある意味を持つ文字である。従って, 表6(2)の可能性がありそうだが, よく見ると核になる文字集団が無い。辞書中の20例程も皆, ほとんど相互に繋がりが無い。当然, 字形上でも[厶]より統一性を欠いている。普遍的な字形なために, 文字整理の観点から部首になったのであろう。いずれにしても表6(4)に属す。そして, このことは[一](いち)にも[二](に)にも当て嵌まる。では, (以前, 議論を中止した)[八](はち)もそうなのだろうか。核になる複数の文字集団([八], 両手, 等)があるために, どうやらこれは表6(3)と見做せそうである。

ところで, <赤塚, 阿部1980>には, 伝統的には見られない部首, 換言すれば新体字故に検討に値するものも見られる。この内, [壮][状][将]などに共通な字形は音符の機能に注目すれば[冂](しょうへん)の常用漢字形ということで処理できよう。だが, [マ][メ][ク][了]の他, [当][尚]などと[単][營]などの字形(異体字)の合併した(つ), [並][兼]などに共通な字形(そいち)の六つは, (編者の説明にもある様に)全くの検字のための部首だから, 表6(4)に属することは明らかである。では, これらは一体何なのだろうか。あるいは, どう理解したらいいのだろうか。

今度はこれについて考えてみよう。さて, ラテン文字は26文字である。少なくとも普通はそう思われている。だが, 実際に個別の語文を見てゆくと, a, é, ù, ÿ, ô, â, ø, ã, ç, ä, æ, œ, などの文字に少なからず出会う。その際, そこに見られる[˘][˙][°][~]などの図形(符号)が, 実は(あくまでも概略的な話だが)漢字では[マ][メ][ク]や[亅][ノ][丶][丨]を始めとする表6(4)に相当するというのが筆者の見解である。だが, 例えば[凵]→[凶]が[a]→[â]の関係に対応するという, このもっともそうな見方にも漠然とした危惧や不安が無いわけではない。それは, 図形(符号の種類)の多寡である。なぜな

ら、日頃から漢字を使用している者の意識では、[a] → [ã] に当たる [木] → [本] の様な「指事」<sup>(26)</sup>の関係にある漢字の対は相当な数に上るからである。だが、この種の符号のラテン文字での予想外の豊富さ<sup>(27)</sup>や漢字とラテン文字の字数の桁違いの相違を思い出せば、この心配は解消できる。

さて、これまで常用漢字の部首についていろいろ考え仕分けしてきた。だが、常用漢字の文字単位を確定するという当初の目的からすれば、これらは言わば準備段階であった。ここからは、そこでの結果である表2から表8を使って文字単位の集合を確定する作業に入る。そこで、始めに基本的な方針を述べよう。

既述の様に、これら諸表の部首は独自な意味（かそれに準ずるイメージ）を持っている上、常に一纏りになって機能していた。従って、(本稿の言う意味での)「文字」であることは明らかである。後は、それが1文字単位なのか複数の文字単位からなっているのかということだけである。換言すれば、(英文での) [a] や [z] と [ng] や [ch] のいずれに類するかを判定することである。そして、それには(「六書」式の) 象形・指事か会意・形声かということが役に立つ。即ち、象形・指事であれば基本的には1文字単位と認めてよいのである。では、会意や形声の場合はどうだろうか。その(少なくとも曾ての字形での) 大半は独自の意味を持つ複数の図形に分解できるように見える。というのも、それらは『説文解字』や近年の金文や甲骨文に関する研究成果によって、字形を過去に向かって遡ることができるらしいからである。だが、それでも本稿の目的下では、半自動的にそれらを(吟味不要として) 除外することは得策ではない。その理由の一つは、本稿の採る集合論的な視点にある。

例えば、[石] という漢字を見てみよう。この字は崖を示す [厂] (がんだれ) の字形の下に塊 [口] のある様子を示した会意文字だという。(古形でも塊と口(くち)の両者はほぼ同じ字形 [凵] である。) だが、本稿の視点ではこの字は文字単位1つ分と数え、2つ分とは数えない。なぜなら、塊(かたまり)を意味する [口] の文字(単位)が現行の漢字(集合)には無いからである。そんなわけだから、会意や形声については、個々の部首や漢字について具体的に調べてゆくのが、結局は確かですぐ取り早い方法であるように思われる。

ところで、この視点を採ると表6の様なやや曖昧な基準<sup>(28)</sup>による分類が何故ほぼそのまま使えるのだろうか。中でも(2)は広汎な現象だけに重要である。そこで、ラテン文字も例に引いて要点を説明する。例えば、[s, ʃ, s', sh, …] の集合に於いて(字形の似ている) [ʃ] を [s] の文字集合(部首)に加えるかどうか判断に窮したとしよう。仮に、ここで基準(2)に照らしてこれを部首 [s] に加えたとすれば、この集合に属す文字単位は([h] 以外に) [s] [ʃ] [s'] の3字となる。これに対し、[ʃ] は [s] の部首に属さないとした場合でも、[s] 系の2字に [ʃ] を併せれば3字だから、両者同数となる。そして、本稿の最終的な狙いの一つは漢字1文字を(平均で)構成する文字単位の数にあるから、この点に関する限りは基準運用の細かな揺れは結果に影響しない。尚、話に現実味を添えるには後方の表6(2)から

例を適宜選ぶとよい。[s] に [大] や [人], [ʃ] に [太] や [入] などは好例であろう。

では, [以] や [為] の様な場合はどうだろうか。辞書では [以] は [人] (ひと), また [為] は (れっか) ([火] の異体字) の部首に分類されているが, 人や火の意味とは関係が無いらしい。そうになると, (先の集合で [s] = [人] とする) [以] が [ʃ] と [s'] のいずれなのかを見極めることに躊躇したとしても不思議ではない。だが, 結論から言えば, どちらの場合も [以] が 1 文字単位となる点で変わりはないのである。この結果, [北] は独自の字形と見ても, (匙を意味する文字集団が中心の) [七] の部首に組み込んでもよくなるし, [四] は 1 単位分と見る限り伝統的な [口] (くにがまえ) の部首から敢えて移す必要はなくなる。

ただ, そうは言っても現実には何でもこの方法で処理できるわけではない。ここでは, それを [日] (ひ) と [𠂔] (ひらび) の関係を例に見てみよう。[𠂔] (ひらび) が表 6(4)型の集合であることは既に見た。また, (常用漢字ではないが)『言う』の意味のこの字自体が (ひ) に加わることは, その字形の類似性から容易に理解できる。では, この部首の残りの文字はどうなるのか。[日] (ひ) に合併するかそうはしないかのいずれかである。だが, この場合にはどちらを採るかによって数が違ってくるのである。(合併すれば複数単位の文字が増えるので文字単位の種類は少なくなろう。)そこで, (ひ) の部首の文字をよく見ると (少なくとも常用漢字に関しては) (ひらび) の部首の文字の字形と殆ど同じである上に, 意味も (太陽) と関係しない文字が少ないことに気付く。また, (ひ) は (ひらび) の文字数に比べて極めて多い。従って, この場合は (ひ) の部首一つに纏めることができるのである<sup>(29)</sup>。

次に, 或る文字が [s'] か [sh] のいずれか, つまり 1 文字単位か否かを俄に決め難い場合はどうであろうか。結論から言えば, これはいずれかに決めなければ困ると言っているだろう。例えば, [鼓] ([s] = [支]) などは好例である。要するに, それは単に [s] 系の文字の数が異なるだけに留まらず, 漢字の文字単位の集合の要素数の確定に影響するからだが, 膨大な数を誇る漢字にあっては結局はその累積効果が無視できないということなのである。

さて, 基本方針もようやく出揃ったので文字単位の確定作業を始めよう。先ずは表 2 である。この内, 会意や形声は, 鼻, 齒, 麻, 麦, 髟, 骨, 雨, 金, 里, 走, 言, 舌, 石, 皮, 支, の各文字で, あとは皆象形や指事である。[支] は字形の起源からすれば [十] (枝) と [又] (手) の二つの文字単位に分かれる可能性はある。だが, [十] が表 6(4)に属するのでそれは否定され, この文字は 1 文字単位となる。[皮] にも [又] (手) の要素がある。だが, 残りの形の部首は無い。そのため, その残部字形自体を独自の文字単位と見做さない限り, 複数の単位には分解できない。そこで, その可能性を探るために古形の意味を見ると, 「獣の皮」とある。だが, 現行では [韋] や [革] がその意味を担っているため難しい。従って, [又] 以外の部分の形が (役割の似た) [十] や [丩] よりいかに複雑であってもその同類と見做すしかないから [皮] は 1 単位である<sup>(30)</sup>。それは, [犬] (いぬ) の文字を (= [大] + [丩] と解釈して) [大] (だい) の部首に入れたいとしても, 比較的近い過去の歴史を巧妙に葬りさらさない限り

は、容易に受け入れられないのと似ている。尚、これは本稿の基本的な方針にも合致している。というのは、(内容より既に明らかな様に)本稿では『康熙字典』方式の伝統的な分類を基本的に踏襲して、幾何学的な視点を全面的に採用する様なことはしていないからである。当然、各漢字の属する部首の分類先もほとんど現行の辞書のままである。

[石]は既に扱った。[舌]には[口](くち)がある。すると残りの字形は([舎]の旧字体[舎]等に見られる元来の部首からして)[干]である。無論、意味面は心配だが、[干]は表6(2)型の部首(表7:補3)なので、ここでは[舌]を2単位と見ておく<sup>(31)</sup>。尚、[舎]中の[土]はこの[干]の異形となる。[言]は[口](くち)と音符からなる形声とある。だが、今では音符だった部分の字形の部首は無いので[皮]に倣って1単位分と見る。[走]は字源的には[土]と下半分の字形に分かれ得る。後者は元来は足を表す象形で、起源は[止](とまる)と同じだと言う。実際、([踏]での様に)[足]の部首ではこの字形を[止]の異体字と認めているから、この部分だけを1単位分と数えるのは不可能ではないかもしれない。だが、[土]に「手を振っている人の姿」を感じる者などまずいない上、多数の使用者が実際に上下二分法で字形を認識しているかは疑わしい<sup>(32)</sup>。従って、この[土]は表6(4)の類で、[走]も1単位分と見る。尚、ついでながら[足](あし)も1単位であること、[止](とまる)にも[走]の下半分の形をした異体字は無いことを確認しておく。

次に、[田](た)と[土](つち)の会意だとある[里](さと)を2単位と数えることに特に問題ない。[麦]の旧字体[麥](むぎ)は意符[久]([久]の異体字)と音符[來]からなっている。だが、[麦]の場合には[久]の上側にある字形を持つ部首が無いので、1単位分と見るしか手はない。[金]は[土]と[ハ]と音符の[今]からなっていたというのが、今では全体で1単位分というのが漢字使用者一般の認識であろう。[雨]は雲と水滴の会意だというのが、そのいずれの図形も単独ではイメージを掴めない。また、そういう字形もなかなか見当たらないから、全体で1単位である。[骨]の[月]が[肉]の異体字であることはすぐ分かる。上半分が骨を表す象形だったという。何となく納得がいきそうな話ではある。だが、この上半分の字形の部首や文字が現行の漢字集合には見当たらないから、やはり全体で1単位である。

[髟](かみ)は[長](ながい)と[彡](けかざり)からなる。そのため、2単位分と見做すのがいい。だが、それには[長]に[髟]の左半分の字形の異体字を認める必要がある。(今はほとんど使わないが)元来が[長]の異体字なのだからそうすることにする。[麻]はもと[林](麻)に([厂](反物)の誤字である)[广]を組合せた字形だという。だが、今では[林]は(はやし)を、また[广]は(まだれ)を意味するのが普通である。従って、現実には全体で1単位と解するのがよい。旧字体[齒]は口(くち)の中の歯を表した象形に、後で音符[止]が付された字形だという。この構成は今の[齒]でも同じだから2単位である。ただ、(くち)も[口]の字形ではないようで、3単位にはならない。[鼻]は[自](はな)と音符である下半分の字形からなっている。音符を更に分解するのは無理だから、2単位分と見る

のがよい。

今度は表3に移る。その内、韋、隶、舛、采、邑、𠂔、艸、艮、聿、耒、𠂔、𠂔、𠂔、が会意や形声である。[𠂔]は元は[又] (手) と[几] (棒) の会意だという。だが、[几] の字形は普通は(つくえ)で、棒の類の意味は無い。そのため、先の[皮]の類と見れば勿論のこと、例え[又]に(手)を宛てなくても1単位と見るのがよい。[𠂔]は表3の部首[月] (しょう) と臥せた人からなる会意だったという。だが、現実の字形は1単位と見る以外に方法は無い。例え[𠂔] (まだれ) の字形を利用してまさか[𠂔] (にすい) と組み合わせるわけにもいかないからである。[𠂔]は曾ては会意だったとあるが、この字形は明らかに1単位である。尚、この字形を持つ例は日本字には少ない上に、常用漢字[𠂔]の様な省略字形もあって判断に困るが、ここでは(表6(4)でなく)表6(2)型の部首として扱った。[耒]は[木] (き) と残り字形との会意とあるが、本稿の方式では1単位となる。従って、更に分解し難い字形の[聿]は当然1単位とされる。[艮]も([目] + [ヒ]の字形の頃ならともかく)この字形ではやはり1単位である。[艸]は会意だと言う。表8の[艸] (くさのめ) が二つだから2単位分である。([𠂔]の字形の存在によっても支持される。)ただし、常用漢字に使う[草][花]などの(くさかんむり)の字形とその旧字体は共に1単位分である。

[𠂔]は字源的には[𠂔]と下半分の字形に分かれるという。ただ、([走]の際に見た様に)後者は独立の文字単位ではなく、[𠂔]も普通は(さんづくり)と見るから、全体で1単位である。勿論、[道][進]などの非単独形も1単位である。[邑]は[口]と[巴]の字形に分けることはできるし、意味面でも前者を[口] (くにがまえ)と見ることは不可能ではない。だが、(くにがまえ)は他の要素を囲み込むものだから1単位と見るのが適当である。(敢えて2単位とする理由は無い。)異体字の(おおごと)は無論1単位である。[采]は手と穀物の種の会意だというが、この字形の分け方を直ぐに思いつく人は多くない。従って、1単位と見る。[舛]は全体で1単位と見る。というのは、左側の[夕]は(ゆうべ)の部首に組み込めなくても、右側の字形が表6(4)でしか処理できないからである。[隶]は字源的には二つの字形に分かれ得るようだが、そのいずれも他の部首と同じでない。従って、1単位である。また、[韋]も基本的にはこれと同じであり、1単位である。尚、[𠂔]については[方]に表6(4)が付いたものと見て1単位とする<sup>(33)</sup>。

表4中で、会意や形声なのは[食]だけである。字形は[艮] 風な部分と残りの字形に分かれ得るらしいが、実際には両者同時に[人] (ひとがしら)と[艮] (こんづくり)に入れない限りは2単位にはならない上、[飲]に見られる[食]の異体字に当たる字形が[艮]には無い。従って、[食]は1単位と見る。

表5も[支] (ぼくづくり) だけである。この字は[又] (手) の字形を持つ会意だったというが、[𠂔][皮]と同じく1単位である。尚、(解字が「未詳」の)[无] (むにょう)と異体字扱いの[无] (すでのづくり)は共に1単位と見る。



続いて、表7に進む。会意や形声は、鼓、黒、音、青、赤、谷、見、比、香、風、色、父、である。〔父〕は右手と鞭の会意だというが、今の字形は1単位である。〔色〕は会意とあるが、本来の字形は（現在の常識的な書写・認識方法と違い）〔巴〕と残り部分には分かれず、全体で1単位である<sup>(34)</sup>。〔風〕は音符〔凡〕と〔虫〕の字形に分かれる。2単位と見てよい。〔香〕は〔黍〕（＝〔禾〕＋（みず））に〔甘〕を併せた会意だったとあるが、今の字形は〔禾〕＋〔日〕か1単位かのいずれかである。ここでは、（太陽）の意味に欠けるこの〔日〕を表6(2)型の（ひ）に繰り込んで2単位とする。〔比〕は人と人の会意だったが、現行の字形も（4画だから）〔匕〕の重複である上、〔此〕の〔匕〕と字源的に同じらしい。従って、〔比〕は2単位と見ることができる。尚、この〔匕〕は表6(3)（とその直前の(a)）で表8の〔匕〕（ひ）と合併させる。〔氏〕の異体字〔民〕は会意だったとあるが、今の字形は1単位である。〔見〕は〔目〕（め）と〔儿〕（ひとあし）の会意だというが、今でも2単位と見ていいだろう。〔谷〕の字形は〔八〕（はち）が二つと音符の〔口〕（くち）からなっていたというが、〔口〕以外の字形をどう見るかによって、1単位か3単位かが決まる。現行の字形を、多数の人が〔八〕（はち）が二つと見ているとは思えない。ここでは一応1単位としておく。

〔赤〕は大と火の会意だったというが、この字形中に火に関係する字形（表4）を見いだすのは難しいから1単位である。〔青〕も元来は上下二つの部分からなっていたというが、（〔食〕に似て）両者を同時に他の部首に繰り込むのは無理であり、1単位となる。〔音〕の字形は字源的には〔立〕と〔日〕分かれ得るが、それは（たつ）でも（ひ）でもない。だが、元々〔立〕（たつ）も〔日〕も表6(2)型なので、〔音〕の各構成要素を更に繰り込めば、2単位と見做せる。〔黒〕は会意とあるが、字源的には（通常の漢字の記憶方法と違って）〔里〕（さと）と〔火〕の異体字（れっか）には分かれ得ない。従って、1単位と見るよりない。〔鼓〕は〔支〕と左側の字形の会意とあり、その〔支〕（表2）は1単位であった。また、残りの字形も太鼓（つづみ）を表すという。従って、それを独自の文字単位（1単位）と認めれば〔鼓〕は2単位となる。ただ、同時にそれには（常に〔支〕と一緒に）この字だけの部首が無い点が幾らか気に掛かる。だが、ローマ字などにも似た例があり問題はなかろう。一例を挙げれば、単独の〔c〕が無い語文でよく見掛ける（外来語用の）〔ch〕がそうである。

表8の会意や形声は、升、黍、だけである。〔黍〕は穀物と水の会意とあるが、字形は〔禾〕（のぎ）と（したみず）と〔人〕風の残存部分からなる。従って、2単位と見るのが適当であろう。〔升〕は元来は左右の手の会意だったとあるが、今では1単位である。

以上で、文字単位の確定が一通り終わったが、以後の作業の便宜のために、ここで今迄の結果を一覧表に示しておく。最初は表6の(2)と(3)の具体例である。

- (2): 巾, 人 (←入), 玉 (←王), 手 (←才), 門 (←門など), 日 (←日),  
 几 (←凡), 干 (←于), 艮 (←良), 采 (←采), 水 (←永), 心 (←必),

- 大 (←夭, 夬), 己 (←巳), 而 (←西), 酉 (←酋),  
 (3): 尸, 夂 (夂), 匚 (匚), 几 (かぜかんむり), 戈 (戔, 戔), 虎 (虎),  
 匕 (匕, または, 比), 氏 (氏), 門 (門), 尤 (尤),  
 (5): (= (3)になれず分裂) 方/於, 長/影, 亘/ヨ, 口 (くち) / 口 (くにがまえ),  
 阜/邑, 肉/月,

<表 6><sup>(35)</sup>

- 補1) 例えば, <人 (←入)>は [入] の字が字形面の重視により, [人] の部首に繰り込まれたことを示す。  
 補2) 例えば, <匚 (匚)>は両者が合併して異体字関係になったこと, また本稿の諸表中では ( ) の前方の字形 [匚] によって便宜的に代表されていることを示す。  
 補3) 例えば, [阜] / [邑] は字形の酷似した / の前後の両部首の未合併を示す。その際, 字形の酷似した (おおごと) と (こごとへん) の方でなく, 単独形を載せた。

もう一つは決定した文字単位の一覧表である。(字は, 基本的には表2から表8への順序で配置してある。) 尚, 異体字形と表6<sup>(3)</sup>型の合併部首は / の後に例で示した。

<1文字単位>

麻, 鳥, 魚, 鬼, 骨, 馬, 革, 雨, 門/門, 長, 金, 麦, 車, 身, 走, 貝, 豆, 言, 角, 行, 虫, 舟, 耳, 羽, 缶, 糸, 米, 竹, 立, 穴, 石, 矢, 矛, 目, 皮, 田, 片, 止, 欠, 木, 月, 日/曰, 方, 斤, 斗, 支, 戸, 弓, 山, 子, 女, 土, 口 (くち), 力, 八, 鬲, 頁, 韋, 隹, 隶, 阜/防, 采, 酉, 邑/郡, 辵/道, 豕, 豕, 虎/虎, (艸)/花, 艮, 舛, 聿, 耒, 禾, 𥝌, 广, 牙, 月/将, 气, 爰, 歹, 戈/戔/戔, 彳, 彳, 弋, 亘, 广, 幺, 巾, 尸, 乚, 夂/夂, 口 (くに), 厂, 匚/匚, 勺, 几/夙, 一, 儿, 於, 食/飯, 足/踏, 衣/補, 肉/肝, 老/考, 羊/美, 示/礼, 玉/珠, 犬/狩, 牛/牧, 水/汁/泰, 火/蒸, 手/打, 心/忙/恭, 刀/刈, 人/化/介, 网/罪/罕/罔, 爪/爰/爵, 无/既, 攴/改, 亘/彙, 尤/尪/尤, 卩/危, 丫/冬, ヨ/彗, 齊, 黑, 青, 臣, 辛, 赤, 谷, 血, 至, 自, 母/每, 皿, 白, 生, 甘, 玄, 氏/氏, 文, 干, 己, 工, 小, 寸, 大, 夕, 土, 又, 竜/襲, 川/巡, 黄, 高, 首, 飛, 面, 非, 色, 用, 父, 毛, 鹿, 辰, 瓜, 而, 臼/興, 而, 疋, 瓦, 升, 虫, 卜, 匕/匕, (176種)

鼎, 鬯, 韭, 鬻, 鼠, 睪, 鹵, 内, (全184種)

<2文字単位>

鼻, 齒, 影, 里, 舌, 鼓, 音, 見, 比, 香, 風, 黍, (全12種)

<表 9>

- 補1) ( ) 内の文字は2文字単位である。例: (艸)

### 3. 文字単位数一覧表

では、次の段階に進もう。1945字の常用漢字が一体、幾つの文字単位から構成されているかを個々に調べるのである。無論、文字単位は表9の各要素が代表的だが、ラテン文字などの場合とは幾らか異なるので要点を説明しておこう。先ず、表9の主要部は〔a〕から〔z〕に該当すると見做すと分かり易いことは既に述べた通りである。そして、これから行なうことは〔ng〕〔ch〕〔stone〕〔ö〕〔ä〕〔ø〕〔æ ç〕などが何文字単位なのかを調べてゆくことにほぼ当たる。ただ、漢字の場合には表9以外にも〔ö〕〔ä〕〔ø〕などに当たる1文字単位が少なからずあるため、その一覧は次の常用漢字の分析表(表-1)中の記載を以てこれに替える。(ただし、利用上の便宜を考慮して表10に(表9以外の)主要なものを挙げた。)尚、方針は既に説明してきたものと基本的に同じである。では、結果の表を示すことから始めよう。また、例えば<悪2>の様な数字はその漢字の文字単位数である。

#### 常用漢字<文字単位数>表

亜1, 悪2 (, 亜), 哀2 (口, 衣), 愛2 (欠/心), 握3 (, 屋), 庄2, 扱2 (, 及), 安2, 案3 (, 安), 暗3 (, 音), (1~10:10): 以1, 衣1, 位2, 囲2 (, 井), 医2, 依2, 委2, 威2 (女/戊), 胃2 (月, 田), 為1, 尉2 (, 寸), 異2 (田, 共), 移3 (, 多), 偉2, 意3 (心, 音), 違2, 維2, 慰3 (, 尉), 遺2 (, 貴), 緯2, 域2 (, 或), 育1, 一1, 壺1, 逸2, 芋2 (, 于), 引1, 印1, 因2 (, 大), 姻3 (, 因), 員1, 院3 (, 完), 陰3 (, 今, 云), 飲2, 隱2, 韻3 (員, 音), (11~46:36): 右1, 字2 (, 于), 羽1, 雨1, 運3 (, 軍), 雲2 (, 云), (47~52:6): 永1, 泳2, 英2 (, 央), 映2 (, 央), 榮2 (, 木), 營2 (, 呂), 詠2 (, 永), 影3 (日, 京, 彡), 銳2 (, 金), 衛2 (行, 韋), 易1, 疫2, 益1, 液2 (, 夜), 駅2 (, 尺), 悅2 (, 心), 越2 (, 戊), 謁2 (, 曷1), 閱2 (, 門), 円1, 延2 (, 廴), 沿2, 炎2 (火, 火), 宴2 (, 讠), 援3 (, 爪/又), 園2 (, 袁), 煙2 (, 火), 遠2 (, 袁), 獯2 (, 袁1), 鉛2, 塩2 (皿/土), 演2 (, 寅), 縁3 (糸, 互, 豕), (53~85:33): 汚2 (, 水), 王1, 凹1, 央1, 応2, 往2 (, 主), 押2 (, 甲), 欧2 (, 区), 殴2 (, 区), 桜2, 翁2 (, 公), 奥1, 横2, 屋2 (尸, 至), 億4 (, 意), 憶4 (, 意), 虞2 (虍, 吳), 乙1, 卸2 (, 卩), 音2, 恩3 (, 因), 溫2 (, 水), 穩2 (, 禾), (86~108:23): 下1, 化2, 火1, 加2 (力, 口), 可1, 仮2 (, 反), 何2 (, 可), 花3 (, 化), 佳3 (, 土, 土), 価2 (, 西), 果1, 河2 (, 可), 科2, 架3 (, 加), 夏1, 家2, 荷3 (, 何), 華1, 菓2 (, 果), 貨3 (, 化), 過2 (, 水), 過2, 嫁3 (, 家), 暇2 (, 日), 禍2 (, 示), 靴3 (, 化), 寡2 (, 宀), 歌3 (, 可, 可), 箇3 (竹, 固), 稼3 (, 家), 課2 (, 果), 蚊2, 我1, 画1, 芽2, 賀3 (, 加), 雅2, 蛾2 (, 我), 介1, 回1, 灰1, 会1, 快2 (, 央1), 戒2

(戈, 升), 改2, 怪2 (, 心), 扞2 (, 手), 悔2 (, 每), 海2 (, 每), 界2 (田, 介), 皆3 (, 比), 械3 (, 戒), 絵2 (, 会), 開2 (, 門), 階4 (, 皆), 解3, 塊2, 壞3 (, 衣/目), 懷3, 貝1, 外2 (, 卜), 劾2 (, 亥), 害2 (, 口), 涯4 (, 厂, 土, 土), 街4 (行, 土, 土), 慨3 (, 既), 該2 (, 亥), 概3 (, 既), 垣2 (, 土), 各2 (欠, 口), 角1, 拈2 (, 広), 革1, 格3 (, 各), 核2 (, 亥), 殼2 (, 爰), 郭2 (, 享), 覺3 (, 見), 較2 (, 交), 隔2, 閣3 (, 各), 確2 (, 石), 獲3 (, 佳/又), 嚇3, 穫3 (, 佳/又), 学2 (, 子), 岳1, 桀2 (木/白), 額4 (, 客), 掛4 (, 卜, 土, 土), 渴2 (, 水), 括3, 活3, 喝2 (, 曷), 渴2 (, 曷), 割3 (, 害), 滑2, 揭2 (, 曷), 轄3 (, 害), 且1, 株2 (, 朱), 刈1, 干1, 刊2, 甘1, 汗2, 缶1, 完2 (, 元), 肝2, 官1, 冠3 (, 元, 寸), 卷2 (, 己), 看2 (手, 目), 陷2, 乾2 (, 乙), 勘2 (, 甚), 患2 (, 串), 貫2 (, 貝), 寒2 (, ㄚ), 喚2 (, 奂), 堪2 (, 甚), 換2 (, 奂), 敢2 (, 欠), 棺2 (, 官), 款2 (, 欠), 間2 (, 日), 閑2 (, 木), 勸2 (, 力), 寬2 (, ㄣ), 幹2 (, 干), 感3 (, 口, 戌), 漠2 (, 水), 慣3 (, 貫), 管2 (, 官), 閔2 (, 門), 飲2 (, 欠), 監2 (臥/皿), 緩3 (, 爰2), 憾4 (, 感), 還2, 館2 (, 官), 環2 (, 玉), 簡3 (, 間), 觀3 (, 見), 艦3 (, 監), 鑑3 (, 監), 丸1, 含2 (口, 今), 岸3 (, 厂, 干), 岩2, 眼2, 頑2 (, 元), 顏3 (, 彡, 頁), 顛3 (, 原), (109~262:154) : 企2 (, 人), 危2 (卩/厂), 机2, 氛1, 岐2, 希1, 忌2, 汽2, 奇2 (大, 可), 祈2, 季2 (, 子), 紀2, 軌2 (, 九), 既2 (, 旡), 記2, 起2, 飢2, 鬼1, 婦2 (ㄩ, 帚), 基2 (其, 土), 寄3 (, 奇), 規3 (夫, 見), 喜2 (, 口), 幾3 (ㄠ, ㄠ, 戌), 揮3 (, 軍), 期2 (, 其), 棋2 (, 其), 貴1, 棄1, 旗2 (, 其), 器2 (, 大), 輝3 (光, 軍), 機4 (, 幾), 騎3 (, 奇), 技2, 宜2 (, 且), 偽2 (, 為), 欺2 (, 其), 義2 (羊, 我), 疑2 (矢/疋), 儀3 (, 義), 戲2 (虚, 戈), 擬3 (, 疑), 犧3 (, 義), 議3 (, 義), 菊3 (, 勺, 米), 吉1, 喫3 (, 口, 大), 詰2 (, 吉), 却2 (, 去), 客3 (, 各), 脚3 (, 却), 逆2 (, 𠂔), 虐1, 九1, 久1, 及1, 弓1, 丘1, 旧1, 休2, 吸2, 朽2 (, 木), 求1, 究2 (穴, 九), 泣2 (, 立), 急2 (, 心), 級2, 糾2 (, 糸), 宮2 (, 宀), 救2, 球2, 給2 (, 合), 窮3, 牛1, 去1, 巨1, 居2 (尸, 古), 拒2 (, 巨), 拋3 (, 欠, 几), 拳2 (, 手), 虚1, 許2 (, 午), 距2 (, 巨), 魚1, 御3 (, 卸), 漁2 (, 魚), 凶1, 共1, 叫2, 狂2 (, 王), 京1, 享1, 供2 (, 共), 協2 (, 十), 況2 (, 兄), 峽2 (, 夾), 挾2 (, 夾), 狹2 (, 夾), 恐2 (, 心), 恭2 (心, 共), 胸3 (, 勺, 凶), 脅2 (, 肉), 強2 (虫, 弘), 教2 (, 攴), 鄉2 (, 邑), 境4 (, 音, 儿), 橋 (, 喬) 2, 矯2 (, 喬), 鏡4 (, 竟), 競2, 響4 (音, 鄉), 驚3 (, 支, 馬), 仰2 (, 人), 曉2 (, 堯), 業1, 凝3 (, 疑), 曲1, 局1, 極3 (, 口/又), 玉1, 斤1, 均2 (, 勺), 近2, 金1, 菌3 (, 口, 禾), 勤2 (, 力), 琴1, 筋3, 禁3 (木, 木, 示), 緊3 (, 臣, 又), 謹2 (, 言), 櫛4 (, 禁), 吟2 (, 今), 銀2, (263~397:135) : 区1, 句2 (口, 勺),

苦2 (, 古), 軀2 (, 区), 具1, 愚2 (, 禺), 空2 (穴, 工), 偶2 (, 禺), 遇2 (, 禺), 隅2 (, 禺), 屈2 (尸, 出), 掘3 (, 屈), 繰3 (, 品, 木), 君2 (口, 丩), 訓2, 勲3 (力, 熏2), 薰3 (, 熏), 軍2 (車, 冫), 郡3 (, 君), 群3 (, 君), (398~417:20) : 兄1, 刑2 (, 刀), 形2 (, 彡), 系1, 徑2 (, 彳), 莖2 (, 艸), 係2 (, 系), 型3 (, 刑), 契2 (, 大), 計2 (, 十), 恵2 (, 心), 啓3 (口, 戸, 攴), 掲2 (, 曷), 溪3 (, 爪, 夫), 經2 (, 糸), 蚩2 (, 虫), 敬2 (, 攴), 景2 (日, 京), 輕2 (, 車), 傾3 (, ヒ, 頁), 携3 (, 隹, 乃1), 繼2 (, 糸), 慶2 (心/夊), 憩4, 3警 (, 敬), 鷄3 (, 鳥), 芸2 (, 云), 迎2 (, 辵), 鯨2 (, 京), 劇3 (, 尢, 豕), 擊3, 激4 (, 白, 放2), 欠1, 穴1, 血1, 決2 (, 夫), 結2 (, 吉), 傑3, 潔3 (, 水, 糸), 月1, 犬1, 件2, 見2, 券2 (, 刀), 肩2 (戸, 月), 建2, 研2, 県1, 儉2 (, 人), 兼1, 劍2 (, 刀), 軒2, 健3 (, 建), 險2, 圈3 (, 卷), 堅3 (, 土), 檢2 (, 木), 嫌2 (, 兼), 猷2 (, 南), 絹2 (, 糸), 遣2 (, 眚), 權2 (, 木), 憲3 (, 心, 目), 賢3 (, 貝), 謙2 (, 兼), 繭3 (, 糸, 虫), 顚2 (, 頁), 驗2, 懸3 (, 県, 系), 元1, 幻1, 玄1, 言1, 弦2, 限2, 原2 (厂, 泉), 現3, 減3 (, 口, 戔), 源3 (, 原), 巖3 (厂/敢), (418~497:80) : 己1, 戸1, 古1, 呼2 (, 口), 固2 (, 古), 狐2, 弧2, 故2 (, 古), 枯2 (, 古), 個3 (, 固), 庫2, 湖3 (, 古), 雇2 (戸, 隹), 誇2 (, 夸), 鼓2, 顧3 (, 雇), 五1, 互1, 午1, 吳1, 後3 (, 幺, 夊), 娛2 (, 吳), 悟3 (, 五, 口), 暮2 (, 其), 語3 (, 吾2), 誤2 (, 吳), 護3 (言), 口1, 工1, 公1, 孔2 (子, 乙), 功2, 巧2 (, 工), 庀1, 甲1, 交1, 光1, 向1, 后1, 好2, 江2, 考2 (, 老), 行1, 坑2 (, 亢), 孝2 (老, 子), 抗2 (, 亢), 攻2, 更1, 効2 (, 交), 幸1, 拘3 (, 句), 肯2 (, 止), 侯2 (, 人), 厚2 (, 厂), 恒2 (, 心), 洪2 (, 共), 皇2 (白, 王), 紅2, 荒3 (, 亡, 川), 郊2 (, 交), 香2 (, 禾), 候2 (, 人), 校2 (, 交), 耕2 (, 井), 航2 (, 亢), 貢2, 降2 (, 阜), 高1, 康2 (, 广), 控3 (, 空), 黄1, 慌4 (, 荒), 港3 (, 共, 己), 硬2 (, 更), 絞2 (, 交), 2項, 溝2 (, 水), 鉏2 (, 金), 構2 (, 木), 綱3 (, 网, 山), 酵3 (, 孝), 稿2, 興2 (白/同), 衡2 (, 行), 鋼3 (, 岡2), 講2 (, 言), 購2 (, 貝), 号1, 合1, 拷3 (, 考), 剛3 (, 岡), 豪1, 克1, 告2 (口, 牛), 谷1, 刻2 (, 亥), 国2, 黑1, 穀3 (, 禾, 殳), 酷3 (, 告), 獄3, 骨1, 込2 (, 入), 今1, 困2, 昆3 (, 比), 恨2, 根2, 婚3 (, 氏, 日), 混4 (, 昆), 紺2, 魂2 (, 云), 壘3 (土, 彡, 艮), 懇3 (, 心), (498~611:114) : 左1, 佐2 (, 左), 査2 (木, 且), 砂2 (, 少), 唆2 (, 口), 差1, 詐2 (, 言), 鎖2 (, 金), 座2 (广, 坐1), 才1, 再1, 災2 (, 川), 妻1, 碎2 (, 石), 宰2 (, 冫), 栽2 (, 木), 彩2 (, 彡), 採2 (, 手), 濟2, 祭1, 齋1, 細2, 菜2 (, 艸), 最3 (曰, 耳, 又), 裁2 (, 衣), 債2 (, 責), 催3 (, 山, 隹), 歲2 (止/戌), 載2 (, 車), 際2 (, 祭), 在1, 材2 (, 才), 劑2, 財2 (, 才), 罪2 (, 网), 嶮3 (, 奇), 作2, 削2 (, 肖), 昨2

(, 日), 索1, 策2 (, 竹), 酢2, 搾3 (, 穴), 錯2 (, 昔), 咲2 (, 口), 冊1, 札2 (, 乙), 刷3 (, 尸, 巾), 殺2 (, 殳), 察2 (, 祭), 撮4 (, 最), 擦2 (, 祭), 雜3 (, 佳, 木), 皿1, 三1, 山1, 參1, 棧2, 蚕2 (, 天), 慘2 (, 參), 産2 (, 生), 傘1, 散2 (, 攴), 算3 (, 目, 升), 酸2 (, 酉), 贊3 (, 夫, 夫), 殘2 (, 歹), 暫3, (612~679:68): 士1, 子1, 支1, 止1, 氏1, 仕2, 史1, 司1, 四1, 市1, 矢1, 旨2 (匕, 日), 死2 (, 匕), 糸1, 至1, 伺2 (, 司), 志2, 私1, 使2 (, 史), 刺2 (, 刀), 始2 (, 台), 姉2 (, 市), 枝2, 祉2, 肢2, 姿2 (, 次), 思2, 指3 (, 旨), 施2 (, 也), 師2 (, 自), 紙2 (, 氏), 脂3 (, 旨), 視3, 紫3 (, 此), 詞2 (, 司), 齒2, 嗣3 (口, 冊, 司), 試3 (, 式), 詩3 (, 寺), 資2 (, 次), 飼2 (, 司), 誌3 (, 志), 雌3 (, 此), 賜2 (, 易), 諮3 (, 次), 示1, 字2 (, 宀), 寺2 (土, 寸), 次1, 耳1, 自1, 似2 (, 以), 兒1, 事1, 侍3 (, 寺), 治2 (, 台), 持3 (, 寺), 時3 (, 寺), 滋3 (, 幺/么), 慈3 (, 心), 辭3 (辛, 舌), 礪3 (, 石), 璽2 (玉, 爾), 式2 (弋, 工), 識4 (, 音, 戈), 軸2 (, 由), 七1, 失1, 室2 (, 至), 疾2, 執2 (幸, 丸), 濕2 (, 水), 漆2 (, 水), 質3 (, 斤, 斤), 実1, 芝2 (, 之), 写2 (, 与), 社2, 車1, 舍1, 者2 (, 老), 射2, 捨2 (, 舍), 赦2, 斜2 (斗, 余), 煮3 (, 者), 遮3 (, 庶), 謝3 (, 射), 邪2, 蛇2 (, 它), 勺1, 尺1, 借2 (, 昔), 酌2 (, 勺), 积2 (, 尺), 爵3 (, 艮/瓜), 若2 (, 右), 弱2 (弓/弓), 寂3 (, 叔), 手1, 主1, 守2 (, 宀), 朱1, 取2, 狩3 (, 守), 首1, 殊2 (, 朱), 珠2 (, 朱), 酒2, 種2 (, 重), 趣3 (, 取), 寿1, 受2 (爪/又), 授3 (, 受), 需2 (雨, 而), 儒3 (, 需), 樹3 (, 寸, 木), 収2 (, 又), 囚2, 州1, 舟1, 秀2 (, 乃), 周1, 宗2, 拾2 (, 合), 秋2, 臭2, 修3 (, 人/攴), 終2 (, 冬), 習2, 週2 (, 周), 就2 (, 京), 衆2 (, 血), 集2 (, 隹), 愁3 (, 秋), 酬2 (, 州), 醜2, 襲2 (, 龍), 十1, 辻2 (, 十), 充1, 住2 (, 主), 柔2 (, 矛), 重1, 從2 (彳, 彳), 洪2 (, 水), 銃2 (, 充), 獸2 (, 犬), 縱3 (, 從), 叔2 (, 又), 祝2 (, 兄), 宿3 (宀, 人, 百), 淑3 (, 叔), 肅1, 縮4 (, 宿), 塾3 (, 丸, 土), 熟3 (, 享, 丸), 出1, 述2, 術2 (, 行), 俊2 (, 人), 春1, 瞬2 (, 目), 旬2 (, 日), 巡2, 盾1, 淮2, 殉3 (, 旬), 純2 (, 屯), 循2 (, 盾), 順2, 準3 (, 隼2), 潤3 (, 門, 王), 遵3 (, 尊), 処2, 初2, 所2, 書2 (, 日), 庶2 (, 广), 暑3 (, 者), 署3 (网, 者), 緒3 (, 者), 諸3 (, 者), 女1, 如2 (, 女), 助2 (, 且), 序2 (, 予), 叙2 (, 余), 徐2 (, 余), 除2 (, 余), 小1, 升1, 少1, 召2 (口, 刀), 匠2, 床2, 抄2 (, 少), 肖1, 迺1, 招3 (, 召), 承1, 昇2 (, 升), 松2 (, 公), 沼3 (, 召), 昭3 (, 召), 寘2 (, 肖), 将2 (, 月), 消2 (, 肖), 症2 (, 正), 祥2, 称2 (, 禾), 笑2 (, 夭), 唱3 (, 日, 日), 商1, 涉2 (, 步), 章1, 紹3 (, 召), 訟2 (, 公), 勝3 (, 力), 掌2 (, 尚), 晶1, 燒2 (, 堯), 焦2 (, 火), 硝2 (, 肖), 粧3 (, 庄2), 詔3 (, 召), 証2 (, 正), 象1, 傷2 (, 人), 獎3 (大, 将),

照4 (, 昭), 詳2, 彰2 (, 章), 障2 (, 章), 衝2 (, 重), 賞2 (貝, 尚), 償3 (, 賞), 礁3 (, 焦), 鐘3 (, 立, 里), 上1, 丈1, 冗1, 条2 (, 欠), 状2 (, 月), 乘1, 城2 (, 成), 淨2 (, 争), 剩2 (, 乘), 常2 (巾, 尚), 情2, 場2 (, 土), 晝1, 蒸3 (, 火, 丞), 緇2 (, 糸), 壤2 (, 土), 孃2 (, 女), 錠3 (, 定), 讓2 (, 言), 釀2 (, 酉), 色1, 食1, 植2 (, 直), 殖2 (, 直), 飾3 (食, 人, 巾), 触2, 囑3 (, 属), 織4 (, 音, 戈), 職4 (, 音, 戈), 辱2, 心1, 1申, 伸2 (, 申), 臣1, 身1, 辛1, 侵2 (, 人), 信2, 津2, 神2 (, 申), 脛2 (, 辰), 娠2 (, 辰), 振2 (, 辰), 浸2 (, 水), 真1, 針2 (, 十), 深2 (, 水), 紳2 (, 申), 進2 (, 佳), 森1, 診3 (, 人, 彡), 寢3 (, 宀, 月), 慎2 (, 真), 新2 (, 斤), 審3 (, 番2), 震2 (雨, 辰), 薪3 (, 新), 親3 (, 見), 人1, 刃1, 仁2 (, 二), 尽1, 迅2, 甚1, 陣2, 尋2 (寸/ㇿ), (680~984:305): 囟1, 水1, 吹2, 垂1, 炊2, 帥2 (, 巾), 粹3 (, 米, 十), 衰1, 推2, 醉3 (, 酉, 十), 遂2, 睡2 (, 垂), 穗3 (, 惠), 鍾2 (, 垂), 隨3 (, 有), 髓3 (, 有), 枢2 (, 区), 崇3 (, 宗), 數3 (, 女, 攴), 据3 (, 居), 杉2, 寸1, (985~1006:22): 畝2 (, 久), 瀨3 (, 賴), 是1, 井1, 世1, 正1, 生1, 成1, 西1, 声1, 制2 (, 刀), 姓2, 征2 (, 正), 性2, 青1, 厓1, 政2 (, 正), 星2 (, 生), 牲2, 省2 (目, 少), 逝3 (, 折), 清2, 盛2 (, 成), 嬭3 (, 疋), 晴2, 勢3 (, 丸, 力), 聖3 (, 口), 誠2 (, 成), 精2, 製3 (, 制), 誓3 (, 折), 静2 (, 争), 請2, 整3 (, 束, 正), 稅2 (, 禾), 夕1, 斥1, 石1, 赤1, 昔1, 析2, 隻2 (佳, 又), 席2 (, 巾), 惜2 (, 昔), 責1, 跡2 (, 亦), 積2 (, 責), 績2 (, 責), 籍3 (, 未, 昔), 切2 (, 七), 折2 (, 斤), 拙2 (, 出), 窃3 (, 切), 接3 (, 妾2), 設2, 雪2 (, ㇿ), 撰2 (, 手), 節3 (, 即), 說2 (, 言), 舌2, 絕2 (, 色), 千1, 川1, 仙2, 占2 (口, 卜), 先1, 宣2 (, 宀), 專2 (, 寸), 泉1, 浅2 (, 水), 洗2 (, 先), 染3 (, 九, 木), 扇2 (, 戸), 栓3 (, 全), 旋2 (, 疋), 船2 (, 舟), 戰2 (, 单), 踐2 (, 足), 錢2 (, 金), 銑2 (, 先), 潜4 (, 替), 線2 (, 泉), 遷3 (, 西/己), 選4 (, 己, 己, 共), 薦2 (, 艸), 織3 (, 糸, 戈), 鮮2, 全2 (, 人, 玉), 前2 (, 刀), 善2 (口/羊), 然2 (犬/火), 禪2 (, 单), 漸3, 繕3 (, 善), (1007~1100:94): 阻2 (, 且), 祖2 (, 且), 租2 (, 且), 素1, 措2 (, 昔), 粗2 (, 且), 組2 (, 且), 疎2 (疋, 束), 訴2 (, 斥), 塑3 (, 朔2), 礎4 (, 疋, 林), 双2 (又, 又), 壯2 (月, 土), 早1, 争1, 走1, 奏1, 相2, 莊3 (, 壯), 草2 (, 早), 送2, 倉1, 搜2 (, 手), 挿2 (, 手), 桑1, 掃2 (, 帚), 曹1, 巢1, 窓2 (, 穴), 創2 (, 倉), 喪1, 葬3 (艸/死), 装3 (, 壯), 僧2 (, 曾), 想3 (, 相), 層2 (, 曾), 縉3 (, 公), 遭2 (, 曹), 槽2 (, 曹), 操3 (, 手), 燥3 (, 火), 霜3 (, 相), 騷3 (, 虫, 又), 藻4 (, 艸, 水), 造3 (, 告), 像2 (, 象), 增2 (, 曾), 憎2 (, 曾), 藏3 (臣/戈), 贈2 (, 曾), 臧4 (, 藏), 即2 (, 卽), 束1, 足1, 促2 (, 足), 則2, 息2, 速2 (, 束),

側3 (, 則), 測3 (, 則), 俗2, 族2 (, 矢), 属2 (尸, 禹), 賊2 (, 貝), 統2 (, 壳), 卒1, 率1, 存1, 村2, 孫2 (, 系), 尊2 (酋, 寸), 損2 (, 員), (1101~1172: 72): 他2 (, 也), 多2, 打2 (, 丁), 妥2 (, 爪), 墮3 (, 有), 脩3 (, 左, 有), 駮2 (, 太), 太1, 对2 (, 寸), 体2 (, 本), 耐2, 3待 (, 寺), 怠2 (, 台), 胎2 (, 台), 退2, 帶1, 泰2 (水/大), 袋3 (, 代), 逮2, 替3 (日, 夫, 夫), 貸3 (, 代), 隊2 (, 阜), 滯2 (, 帶), 態2 (, 能), 大1, 代2 (人, 弋), 台1, 第2 (, 竹), 題2 (, 是), 淹2 (, 奄), 宅2 (, 宀), 挾2 (, 尺), 沢2 (, 尺), 卓1, 拓2, 託2 (, 言), 濯3 (, 羽, 佳), 諾3 (, 右), 濁3 (, 水), 但2 (, 旦), 達2, 脫2 (, 月), 奪3 (大, 佳, 寸), 棚3 (, 月, 月), 丹1, 担2 (, 旦), 單1, 炭2 (, 火), 肝2, 探2 (, 手), 淡3 (, 炎), 短2, 嘆2 (, 口), 端2 (, 立), 誕3 (, 延), 鍛3 (, 段), 团2, 男2 (田, 力), 段2 (, 爰), 断2 (, 斤), 彈2 (, 单), 暖3 (, 爰), 談3 (, 炎), 壇2 (, 土), (1173~1236: 64): 地2 (, 也), 池2 (, 也), 知2, 值2 (, 直), 恥2, 致2, 遲3 (尸, 羊), 痴3 (, 知), 稚2, 置2 (网, 直), 竹1, 畜2 (田, 玄), 逐2 (, 豕), 蓄3 (, 畜), 築3 (, 竹, 木), 秩2 (, 失), 窰2 (至, 穴), 茶1, 着2 (羊/目), 嫡2 (, 女), 中1, 仲2 (, 中), 虫1, 沖2 (, 中), 宙2 (, 由), 忠2 (, 中), 抽2 (, 由), 注2 (, 主), 昼2 (, 旦), 柱2 (, 主), 衷1, 鑄2 (, 寿), 駐2 (, 主), 著3 (, 者), 貯2 (, 貝), 丁1, 弔1, 斤2 (, 丁), 兆1, 町2 (田, 丁), 長1, 挑2 (, 兆), 帳2, 張2, 彫2 (, 周), 眇2 (, 兆), 鈞2 (, 勺), 頂2 (, 丁), 鳥1, 朝2 (, 月), 脹2, 超3 (, 召), 腸2 (, 月), 眺2 (, 兆), 徵3 (彳/支/王), 潮3 (, 朝), 澄3 (, 登), 調2 (, 周), 聽2 (, 耳), 懲4 (, 徵), 直1, 勅2 (, 束), 沈2 (, 水), 珍3 (, 人, 彡), 朕2 (, 月), 陳2 (, 東), 賃3 (, 任), 鎮2 (, 真), (1237~1304: 68): 追2 (, 自), 墜3 (, 隊), 通2 (, 甬), 痛2 (, 甬), 塚2 (, 土), 漬2 (, 責), 坪2 (, 平), (1305~1311: 7): 低2 (, 人), 呈2 (, 口), 廷2 (, 壬), 弟1, 定2 (, 宀), 底2 (, 厂), 抵2 (, 手), 邸2 (, 邑), 亭1, 貞1, 帝1, 訂2 (, 丁), 庭3 (, 廷), 通2 (, 帛), 停2 (, 亭), 偵2 (, 貞), 堤2 (, 是), 提2 (, 是), 程3 (, 呈), 艇3 (, 廷), 締2 (, 帝), 泥3 (, 尼), 的2 (, 勺), 笛2 (, 由), 摘2 (, 手), 滴2 (, 水), 適2, 敵2, 迭2 (, 失), 哲3 (, 折), 鉄2 (, 失), 徹3 (, 育, 攴), 撤3 (, 育, 攴), 天1, 典1, 店3 (, 占), 点3 (, 占), 展2 (, 尸), 添3 (, 心, 夭), 軫2 (, 云), 田1, 伝2 (, 云), 殿2 (, 爰), 電1, (1312~1355: 44): 斗1, 吐2, 徒2, 途2 (, 余), 都3 (, 者), 渡3 (, 度), 塗3 (, 余), 土1, 奴2, 努3 (, 奴), 度2 (, 又), 怒3 (, 奴), 刀1, 冬1, 灯2 (, 丁), 当1, 投2, 豆1, 東1, 到2 (, 至), 逃2 (, 兆), 倒3 (, 到), 凍2 (, 東), 唐2 (, 口), 島1, 桃2 (, 兆), 討2, 透3 (, 秀), 党2 (尚, 儿), 悼2 (, 卓), 盜2 (, 次), 陶3 (, 勺, 缶), 塔3 (, 合), 搯3 (, 合), 棟2 (, 東), 湯2 (, 水), 痘2, 登2 (, 豆), 答2 (, 合), 等2 (, 寺), 筒2 (, 同), 統2 (, 充),





稻3 (／禾／爪), 踏3 (, 水, 曰), 糖3 (, 唐), 頭2, 膳3 (, 言), 鬩3 (, 豆, 寸),  
 騰3 (, 馬), 同1, 洞2 (, 同), 胴2 (, 同), 動2 (, 重), 堂2 (土, 尚), 童2 (立,  
 里), 道2 (, 首), 働3 (, 動), 銅2 (, 同), 導3 (, 道), 峠3 (山, 上, 下), 匿3 (,  
 若), 特3 (, 寺), 得3 (, 日／寸), 督3 (, 叔), 德2 (, 彳), 篤2, 毒1, 独2, 読2  
 (, 売), 凸1, 突2, 届2 (, 由), 屯1, 豚2, 鈍2 (, 屯), 曇3 (, 雲), (1356~1431:  
 76) <燈→灯>; 内1, 南1, 軟2, 難2 (, 隹), (1432~1435:4) : 二1, 尼2 (, 匕),  
 弍2 (二／弋), 肉1, 日1, 入1, 乳3 (子, 爪, 乙), 尿2 (, 水), 任2 (, 壬), 妊2  
 (, 壬), 忍2 (, 刃), 認3 (, 忍), (1436~1447:12) : 寧3 (／宀／心), 熱3 (, 丸,  
 火), 年1, 念2 (, 今), 粘2 (, 占), 燃3 (, 然), (1448~1453:6) : 惱3 (, 心), 納2  
 (, 内), 能1, 腦3 (, 月), 農2 (, 辰), 濃3 (, 農), (1454~1459:6) : 把2 (, 巴),  
 波2 (, 皮), 派2 (, 水), 破2 (, 皮), 覇3 (而, 革, 月), 馬1, 婆3 (, 波), 拜2 (,  
 手), 杯2 (, 不), 背2 (, 北), 肺2 (, 市), 俳2, 配2, 排2, 敗2, 廢2 (, 発), 輩2  
 (, 非), 壳1, 倍3 (, ／口), 梅2 (, 每), 培3 (, ／口), 陪3 (, ／口), 媒3 (,  
 某), 買2 (, 网), 賠3 (, ／口), 白1, 伯2 (, 白), 拍2 (, 白), 泊2 (, 白), 迫2  
 (, 白), 船2 (, 舟), 博3 (, 甫, 寸), 薄4 (, 甫, 寸), 麦1, 漠4 (, 艸, 大, 日),  
 縛2 (, 甫, 寸), 爆4 (, 暴), 箱3 (, 相), 畑2, 肌2 (, 几), 八1, 鉢 (, 本) 2, 発  
 1, 髮3 (, 友), 伐2 (, 戈), 拔2 (, 友), 罰3 (, 刀, 网), 閥3 (, 伐), 反1, 半1,  
 犯2 (, 阝), 帆2 (, 凡), 伴2 (, 半), 判2 (, 半), 坂2 (, 反), 板2 (, 反), 版2  
 (片, 反), 班3 (刀, 玉, 玉), 畔2 (, 半), 般2, 販2 (, 反), 飯2 (, 反), 搬3 (,  
 般), 煩2, 頒2 (, 分), 範3 (, 車, 阝), 繁3 (, 敏), 藩4 (, 番), 晚 (, 免), 番2  
 (采, 田), 蜜2 (, 亦), 盤3 (, 般), (1460~1531:72) : 比2 (匕, 匕), 皮1, 妃2, 否  
 2 (口, 不), 批3 (, 比), 彼2 (, 皮), 披2 (, 皮), 肥2 (, 巴), 非1, 卑1, 飛1, 疲  
 2 (皮, 彳), 秘2 (, 必), 被2 (, 皮), 悲2, 厓2 (, 非), 費2 (, 弗), 碑2 (, 卑), 罷2  
 (网, 能), 避3 (, ／辛), 尾2 (, 毛), 美2 (大, 羊), 備2 (, 人), 微3 (／彳／支),  
 鼻2 (／自), 匹1, 必1, 泌2 (, 必), 筆2 (, 聿), 姬2 (, 臣), 百1, 氷1, 表1, 俵  
 2 (, 表), 票2 (示, 而), 評2 (, 平), 漂3 (, 票), 標3 (, 票), 苗2, 秒2 (, 少),  
 病2 (, 丙), 描3 (, 苗), 貓3 (, 苗), 品1, 浜2 (, 兵), 貧2 (, 分), 賓2 (貝／  
 宀), 頻2 (, 步), 敏2 (, 每), 瓶2 (并, 瓦), (1532~1581:50) : 不1, 夫1, 父1, 付  
 2, 布1, 扶2 (, 夫), 府3 (, 付), 怖2 (, 布), 附3 (, 付), 負1, 赴2 (, 卜), 浮3  
 (, 子, 爪), 婦2 (, 帚), 符3 (, 付), 富2 (, 宀), 普2 (日, 並), 腐4 (, 府), 敷2  
 (, 甫, 攴), 膚3 (虎, 月, 田), 賦3 (, 武), 譜3 (, 普), 侮2 (, 每), 武2 (弋／  
 止), 部3 (, ／口), 舞2 (, 舛), 封3 (, 土, 土), 風2 (凡, 虫), 伏2, 服2 (, 月),  
 副2 (, 刀), 幅2 (, 巾), 復3 (, ／攴), 福2 (, 示), 腹3 (, ／攴), 復3 (, ／攴),  
 覆4 (而, 復), 扌2 (, 手), 沸2 (, 弗), 仏2 (, 人), 物2 (, 勿), 粉2 (, 分), 紛2

(, 分), 霽2 (, 分), 噴3 (, /貝), 墳3 (, /貝), 憤3 (, /貝), 奮3 (大, 佳, 田), 分1, 文1, 聞2, (1582~1631:50) : 丙1, 平1, 兵1, 併2 (, 并), 並1, 柄2 (, 丙), 陞4 (, 土, 比), 閉2 (, 才), 塹3 (, 尸, 并), 幣3 (, /支), 弊3 (, /支), 米1, 壁3 (, /辛), 癖3 (, /辛), 別2 (, 刀), 片1, 辺2, 返2 (, 反), 變2 (, 亦), 偏3 (, 戸, 冊), 遍3 (, 扁), 編3 (, 扁), 弁1, 便2 (, 更), 勉2 (, 免), (1632~1656:25) : 步1, 保2 (人, 呆), 捕2 (, 甫), 浦2 (, 甫), 補2 (, 甫), 舖2 (舍, 甫), 母1, 募4 (艸, 大, 日, 力), 墓4 (土, 莫), 慕4 (心, 莫), 暮4 (日, 莫), 簿4 (, 甫, 寸), 方1, 包2 (, 己), 芳2 (, 方), 邦2 (, 邑), 奉1, 宝2, 抱3 (, 包), 放2, 法2 (, 去), 泡3 (, 包), 胞3 (, 包), 俸2 (, 奉), 倣3 (, 放), 峰2 (, 山), 砲3 (, 包), 崩3 (山, 朋), 訪2, 報2 (, 幸), 豐2 (, 豆), 飽3 (, 包), 褓3 (衣, 保), 縫3 (, 逢2), 亡1, 乏1, 忙2 (, 亡), 坊2, 妨2, 忘2 (, 亡), 防2, 房2 (, 方), 肪2, 某2 (甘, 木), 冒2 (目, 日), 剖2 (, /口), 紡2, 望3 (亡, 月, 王), 傍2 (, 人), 帽3 (, 冒), 棒2 (, 奉), 質2 (, 卯), 暴3 (日/水), 膨3 (, 月, 彭2), 謀3 (, 某), 北1, 木1, 朴2 (, 卜), 牧2, 僕2 (, 人), 墨2 (, 黑), 撲2 (, 手), 没2, 掘3 (, 屈), 本1, 奔2 (, 大), 翻3 (, 番), 凡1, 盆2 (, 分), (1657~1725:69) : 麻1, 摩2 (, 麻), 磨2 (, 麻), 魔2 (, 麻), 每1, 妹2 (, 未), 枚2, 埋3, 幕4 (, 莫), 膜4 (, 莫), 又1, 末1, 抹2 (, 未), 万1, 滿2 (, 水), 慢4 (, /又/日), 漫4 (, /又/日), (1726~1742:17) : 未1, 味2 (, 未), 魅2 (, 未), 岬2 (, 甲), 密3 (山, 宀, 必), 脈2 (, 月), 妙2 (, 少), 民1, 眠2 (, 民), (1743~1751:9) : 矛1, 務3 (矛, 支, 力), 無1, 夢2 (, 夕), 霧4 (, 務), 娘2 (, 良), (1752~1757:6) : 名2 (夕, 口), 命2 (口, 令), 明2 (日, 月), 迷2, 盟3 (, 明), 銘3 (, 名), 鳴2, 滅3 (, 火, 戌), 免1, 面1, 綿2 (, 糸), (1758~1768:11) : 茂2 (, 戌), 模4 (, 莫), 毛1, 妄2 (, 亡), 盲2 (, 亡), 耗2, 猛3 (, 子, 皿), 網3 (, 网, 亡), 目1, 黠2 (, 黑), 門1, 紋2, 問2 (, 口), 匄1, (1769~1782:14) : 夜1, 野3 (予, 里), 厓1, 役2, 約2 (, 勺), 詛2 (, 尺), 藥3 (, 藥), 躍3 (, 足), (1783~1790:8) : 由1, 油2 (, 由), 愉3 (, /月), 諭3 (, /月), 輸3 (, /月), 癒4 (, 心, /月), 唯2 (, 口), 友1, 有1, 勇2 (力, 甬), 幽3 (山, 幺), 悠3 (, 人/支), 郵2 (, 垂), 猶2 (, 酋), 裕2, 遊3 (, 子, 攴), 雄2 (, 佳), 誘3 (, 秀), 憂3 (久/心), 融2, 優4 (, 憂), (1791~1811:21) : 与1, 予1, 余1, 譽2 (, 言), 預2 (, 予), 幼2 (, 幺), 用1, 羊1, 洋2, 要2 (, 酉), 容2 (, 谷), 庸2 (, 用), 揚2 (, 手), 搖2 (, 手), 葉2 (, 艸), 陽2 (, 阜), 溶3 (, 容), 腰3 (, 要), 樣2 (, 木), 踊2 (, 甬), 窯3 (穴, 羊, 火), 養2 (食, 羊), 擁2 (, 手), 譎2 (, 言), 曜3 (, 日), 抑2 (, 手), 浴2 (, 谷), 欲2, 翌2 (, 羽), 翼3 (, 異), (1812~1841:30) : 裸2 (, 果), 羅3 (网, 維), 来1, 雷2 (, 雨), 賴2 (, 束), 絡3 (, 各), 落4 (, 洛), 酪3

(, 各), 乱 3 (舌, 乙), 卵 1, 覧 3 (臥/見), 濫 3 (, 臥/皿), 欄 3 (, 門, 東), (1842~1854:13): 吏 1, 利 2, 里 2, 理 3 (, 里), 痢 3 (, 利), 裏 3 (衣, 里), 履 4 (, 復), 離 2 (, 隹), 陸 2 (, 阜), 立 1, 律 2, 略 3 (, 各), 柳 2 (, 卯), 流 2 (, 水), 留 2 (, 卯), 童 1, 粒 2, 隆 2 (, /生), 硫 2 (, 石), 旅 1, 虜 3 (虍, 力, 田), 慮 3 (虍, 心, 田), 了 1, 両 1, 良 1, 料 2, 涼 2 (, 京), 獺 2 (, 犬), 陵 3 (, /欠), 量 1, 僚 2 (, 人), 領 2 (, 令), 寮 2 (, 宀), 療 2 (, 疒), 糧 2 (, 量), 力 1, 緑 2 (, 糸), 林 2 (木, 木), 厘 3 (, 里), 倫 2 (, 人), 輪 2 (, 車), 隣 3 (, 米, 舛), 臨 2 (品, 臥), (1855~1897:43): 淚 3 (, 戾), 累 2 (糸, 田), 壘 2 (, 土), 類 3 (, 米, 大), (1898~1901:4): 令 1, 礼 2 (, 示), 冷 2 (, 令), 勵 3 (, 力), 戾 2 (戸, 大), 例 3 (, 列), 鈴 2 (, 令), 零 2 (, 令), 靈 1, 隸 2 (, 隶), 齡 2 (, 令), 麗 1, 曆 3 (日/林), 歷 3 (止/林), 列 2, 劣 2 (, 少), 烈 3 (, 列), 裂 3 (, 列), 恋 2 (, 亦), 連 2, 廉 2 (, 兼), 練 2 (, 東), 鍊 2 (, 東), (1902~1924:23): 炉 2 (, 戸), 路 3 (, 各), 露 4 (, 路), 老 1, 勞 2 (, 力), 郎 2 (, 良), 朗 2 (, 良), 浪 2 (, 良), 廊 3 (, 郎), 楼 3 (, 女, 木), 漏 3 (, 尸, 雨), 六 1, 録 2 (, 金), 論 2 (, 言), (1925~1938:14) 和 2, 話 3 (, 舌), 賄 2 (, 有), 惑 2 (, 或), 桤 3 (, 木, 十), 灣 3 (, 亦, 弓), 腕 4 (, 艹, 夕, 卩), (1939~1945:7):

<表-1>

補 1:  は常用漢字だが、当用漢字でないもの。

2:  は当用漢字だが、常用漢字でないもの。

3: (1898~1901:4) の様な数字は五十音順の読みで整理した、通し番号とその文字数を示す。この場合, [ル] で始まる読みは1898から1901番までの4文字である。

4: 例えば, <燈→灯>は字体の交替を示す。ただし, これ以外に類例は無い。また, 当用漢字から常用漢字へはこの対を除いて総て追加のみである。

<凡例>

(a)<亜 1>はこの字が全体として1文字単位であることを示す。また, <悪 2 (, 亜)>はこの字が2文字単位であることの他に, その構成要素は本表で既に言及済みの[亜]と表9の要素からなっていることを示す。尚, 表9の要素(この場合は[心])は通常は省略して, この例の様に[, ]で示す。ただし, 次の(b)の[哀][鋭]の様な例は除く。

(b)<哀 2 (口, 衣)>はこの字が[口]と[衣]という要素(文字単位)からなる2文字単位であることを示す。(ただし, 自明でない場合に限る。)また, <鋭 2 (, 金)>は省略する要素が[悪]の場合と逆になっているが, これには印字上の技術的な問題も関係している。

(即ち, 本来の[ ]の字形が通常は単独では使わないために, JIS水準のワープロ辞書に無いのである。)

(c)<愛 2 (欠/心)>は2つの構成要素([欠][心])と表6(4)の小図形からなることを示す。

尚、(印刷技術上の問題も含めて)その例だけで意味が分かり難い場合は、その前後にある同じ字形の文字の例を併せれば理解できるように工夫してある。例えば、＜揮3 (, 軍)＞は(てへん)と〔軍〕からなるが、(てへん)は1文字単位であるから、〔軍〕は2文字単位とすることを示す。尚、本表中で初めて登場するものであっても容易に推測できるものについては説明を省いた。

(d)＜壁3（，／辛）＞はこの字が〔土〕（表9の要素で省略）と〔辛〕と残りの字形（多くは単独字形がワープロ辞書に無い）の3文字単位からなっていることを示す。また，＜憂3（／夕／心）＞は〔心〕と〔夕〕と残りの字形からなる3文字単位であることを示す。ただし，＜影3（日，京，彡）＞などと違って3番目の文字単位の具体的な姿（例えば，〔頁〕と同じなのか否か）が必ずしも明瞭でないことを示す。

次の表10は＜1文字単位＞表と＜複数文字単位＞表からなる。また、＜1文字単位＞表の内、＜B＞は単独字体が常用漢字でないものである。

< 1 文字單位：A >

皿，以，為，育，一，尅，引，印，因，員，右，永，易，益，円，王，凹，央，奧，乙，下，  
 可，果，夏，華，我，画，介，回，灰，会，岳，且，刈，官，丸，氦，希，貴，棄，吉，虐，  
 九，久，及，丘，旧，求，去，巨，虚，凶，共，京，業，曲，局，琴，区，具，兄，系，鼎，  
 兼，元，幻，古，五，互，午，吳，公，広，甲，交，光，向，后，更，幸，号，合，豪，克，  
 今，左，差，才，再，妻，祭，齋，在，索，冊，三，參，叁，史，司，四，市，私，次，兕，  
 事，七，失，寒，舍，勺，尺，主，朱，寿，州，周，十，充，重，肅，出，春，盾，升，少，  
 肖，尙，承，商，章，晶，象，上，丈，冗，乘，疊，申，真，森，刃，尽，甚，囟，垂，衰，  
 是，井，世，正，成，西，声，斥，昔，責，千，先，泉，素，早，争，奏，倉，桑，曹，巢，  
 喪，束，卒，率，存，太，帶，台，卓，丹，单，茶，中，衷，昼，丁，弔，兆，直，弟，亭，  
 貞，帝，天，典，電，冬，当，東，唐，島，同，毒，凸，乚，内，南，二，入，年，能，壳，  
 癸，反，半，卑，匹，必，百，氷，表，品，不，夫，布，負，分，丙，平，兵，並，弁，步，  
 奉，亡，乏，北，本，凡，每，末，万，未，無，免，面，匐，夜，匚，由，友，有，与，予，  
 余，来，卵，吏，両，良，了，量，令，靈，麗，六，(264種)

< 1 文字単位：B >

屮, 𠂔, 艸, 兌, 袁, 台, 塹, 县, 亏, 娑, 夫, 缶, 显, 𡗗, 段, 另, 良, 亘, 壳, 雀, 𪚩,  
 曷, 𣎵, 伯, 𦰇, 卅, 𧈐, 耳, 泰, 霍, 覓, 莫, 关, 罍, 产, 豉, 𢆏, 𨾏, 𠬞, 斗, 兴, 𤄎,  
 𠬞, 喬, 竟, 苟, 叩, 切, 矣, 𠃊, 董, 禹, 尹, 开, 十, 圣, 由, 迷, 貪, 冑, 書, 𠬞, 显,  
 乎, 夸, 亏, 亢, 矣, 旱, 牟, 蒿, 隼, 爰, 乍, 貞, 坐, 戕, 采, 束, 杀, 戔, 背, 於, 白,  
 奎, 弓, 朮, 𣎵, 享, 朮, 孚, 尔, 𦰇, 之, 易, 丞, 𪚩, 囊, 禹, 曼, 桀, 亲, 𠬞, 豕, 伟,

奎, 席, 亦, 叟, 聿, 聿, 曾, 也, 乇, 蜀, 旦, 幸, 耑, 亶, 商, 宁, 勺, 卓, 恵, 先, 氏, 壬, 帛, 滔, 函, 辰, 不, 弗, 肅, 并, 瓦, 畐, 弋, 艮, 勿, 呆, 甫, 卉, 丰, 夆, 卯, 美, 旁, 蒿, 芦, 其, 戊, 于, 云, 寅, 亥, 奂, 爾, 左, 𠂔, 串, 夾, 戊, 舜, 它, 呂, 夭, 或, 戊, 帛, 甬, 兴, 声, 聿, 義, 雍, 臥, 离, 充, 胤, 猋, 录, 侖, 厉, 畏, (185種)

< 2 文字単位 >

忿, 梟, 蚤, 戎, 翟, 尋, 音, 辟, 孚, 复, 賁, 扁, 爰, 褒, 萑, 亟, 熏, 奚, 兹, 隼, 萎, 杂, 卒, 妾, 俞, 奎, 菱, 薺, 從, 裁, 前, 段, 展, 宓, 馭, 攸,

< 3 文字単位 >

憂, 暴, 曼, 蔵,

< 表10 >

補1: \_\_は常用漢字だが, 当用漢字でないもの。

次に, この表 I に到達する過程, 中でも表10を中心とする部首以外のものについて補足しよう。さて, 検字面から言うと漢字は二種類に大別されている。部首とそれ以外のものである。そのため, [笑] は部首である [竹] からは探せるが, [夭] からはできない。尤も [妃] や [好] も ([己] や [子] の部首からは不可能で) [女] からしか探せないから, 部首というのは代表名を持った互いに独立な文字グループ (部分集合) であると言える。無論, [女] のグループ (部首) には個別の文字 [女] も所属するが, 対象の集合を「常用漢字」に限定すれば表3の例の様に自身がグループ外に弾き出されることもあり得る。では, 部首の (代表を兼ねる) 文字と (表10に集めた) それ以外の文字との違いはどこにあるのだろうか。私見では, 異体字の有無と密接な関係がありそうである。即ち, 部首の場合には, 表4と表5の例の様に (中には慣れない者を困惑させる<sup>(36)</sup>) 全く異なる複数の字形を持つものが少なからずあるのに対し, 部首以外ではその傾向がかなり薄れるということである。

だが, これは同時に, 部首以外では文字単位を客観的に決定することが可能であるし, またその必要があるということの意味する。(また, 或る特定の文字の字形構成の中で当該字形の占める位置も部首の方が自由度が大きいように見える。) 従って, 例えば [第] から [竹] を抜いた残余の形を (例え, 歴史的な経緯からそれが採用可能な解釈の一つであったとしても) 半ば自動的に [弟] の異体字とするようなことは避ける方針を取った。(ただし, 新・旧字体の関係は基本的にはこれとは別である。) だが, そうなると (現行の) 字形に大きな比重がかかり, 極端な場合には [器] は5単位, [貴] は [中] [一] [貝] の3単位, [場] は [土] [日] [一] [勿] の4単位という解釈も不可能ではなくなる。だが, 既述の様にこれは本稿の立場ではない。無論, 一意に決め難いことも一因である。そこで, 文字単位数の設定・決定に当たっては, 隷書・楷書体が成立する以前の古い時代の字形の情報をも考慮することにする。本稿では主として < 藤堂1981 > (以下, Tと略記) に依ることにした。

では、代表的な例を適宜選んで具体的な説明に入ろう。まずは<1文字単位：A>からである。さて、[因]が部首の[口]（くに）と[大]に分かれるというのは一見したところ極く当然の解釈である。だが、（元来の字形構成が）漢和辞典には象形とあり、Tには説明が無い。従って、2単位とは見ない。[員]も部首[口]（くち）と[貝]からなるように見える。だが、Tには[貝]と[〇印]との会意とあるから、（後者を表6(4)の小図形と解して）[員]は1単位と見做す。[益]も[皿]と[水]の会意とあるが、現行の字形は[員]と同様の理由で1単位である。

次は、[森][舍][岳][泉][会][合]をどうして1単位と見做したかである。[林]は[木]が二つで2単位だが、[森]は1単位とした。無論、3単位とすることも不可能ではないが、[林]との意味の違いがほとんど認められない上に、[品][晶]や[洩][撰][壘]等の旧字体に見られる同じ字を三角形状に三つ並べて「沢山の・・・」を表す字形のためにそう見做すことにした。（因みに[器]の様に同じ要素が四つあっても同じである。）Tによれば、[舍]の旧字体の[舍]は[口]の記号に[余]が加わった字体が変化・融合する過程で二つの点が落ちてできたものと言う。従って、複数単位の文字としたいところだが、常用漢字集合の要素には（[口]はともかく）[全]という字形は無い。だから、この字全体を新しい要素（1単位）として登録するより他に無いのである。（無論、[人]+[舌]という分解法も採らない。）尚、この例の説明に旧字体を持ち出したことには新字体との違いが少ないことが幾分関係している。つまり、結局は同じことでも、この方が理解が容易だからである。また、同じことは[告]にも当て嵌まり、この字が[口]と[牛]からなる2単位だということは納得しやすい。さて、[岳]と[泉]はそれぞれ[丘]と[山]、[白]と[水]に別れそうである。だが、[泉]は象形であり、[嶽]の（古字でもある）新字体[岳]の上半分の字形は字源が[丘]（おか）とは別だということから、共に全体で1単位とならざるを得ない。[会]の部首は（ひとがしら）とされているからこの字は[人]と[云]に分解できる可能性がある。だが、省略する前の旧字体を見る限り（[△]に繋がる上半分と[云]に分かれるから）それは無理である。つまり、常用漢字の集合中には構成要素を持たないのである。そうであれば、結局は[会]全体で1単位と見るしかない。Tによれば、[合]は[口]（くち）と[△]に繋がる上半分に分解されるという。だが、後者は常用漢字には見られない字形である。従って、それを表6(4)の小図形と解すれば、[大]に対する[太]の類となって1単位となる。

今度は<1文字単位：B>に話を移す。基本的な違いは単独の字形が常用漢字ではない点である。ところで、この中はほぼ次の様に分けることができる。即ち、①（常用漢字ではないが）日本文で使う。②（中国の）以前の漢字にはある。③単独形での使用はほとんど見られない。そこで、基本的には①は勿論のこと②もこの表に採用することにする。ただ、そうは言っても、この分類はかなり抽象的で、その具体化はそう容易ではない。そこで次のようにする。即ち、まず（旧字体を含めて）単独の字形が<赤塚・阿部1980>に掲載されているものは①の

条件に合致していると思ふ。また、単独の字形がTの項目にある場合には、その要素を用いた組合せ字形が漢字として馴染みあるものであれば、②の条件を満たしていると解する。

だが、③は些か複雑である。例えば、[喜][鼓][樹][膨]などには共通の字形が明らかに存在する。問題はこれを文字単位として①の[其][也][瓦][享]などと同等の扱いができるかどうかである。私見では、この場合の様に複数の組合せ文字の例が存在することを条件にすれば認められるように思う。ただ、その場合には新しく決断を迫られる場合が生ずる。例えば、[唐]と[庸]に共通な[声]という図形をどう扱うかがそうである。先ず、この字形は漢字常用者の通常の認識では完結した文字ではない。では、一体何なのだろうか。Tなどの記述を見る限り、これらは[庚]と[口]や[用]からなる字が結果的に省略(簡化)されたと解されているようである。もしそれを、この字形が[庚]の異体字に匹敵するものだと再解釈すれば、例えば[習]の[白]は[自]と、[摘]の右半分<sup>(37)</sup>は[帝]+[口]と、また[責]は[束]+[貝]と同じ文字であるということまで認めることになる。だが、これは本稿の採る立場ではない。つまり、この種の所謂「省略形」は異体字とは別次元のものと考えてるのである。そんなわけだから、この字形の場合は(常用漢字でない[庚]に替わって)新しい文字単位として認定するか否かということが問題になっているわけである。無論、(例に挙げた[唐]と[庸]での僅かな字形の違いも加わって)判断には迷うが、(決定的な要因にはならないと踏んで)ここでは1単位と見做すことにする。

では、この「省略形」は全く意味が無いのだろうか。例えば、[接]を構成する[妾]は[女]と[辛]からなっていたという。無論、今では字形の一部は省略形の[立]に変わっているが、[辛]が1単位だから[立]も1単位にできるという面は否定できない。無論、これは[習]の[白]にも当て嵌まる話である<sup>(38)</sup>。尚、これと似たものに<sup>入れ替わり</sup>とでも言うべき字形構成法がある。例えば、[膚]は[盧]に[月](にくづき)を加えたところ結局は[皿]と<sup>入れ替わってしまっ</sup>たらしい<sup>(39)</sup>。

ところで、この<1文字単位：B>にはもう一つのグループを加えることができる。それは、文字の履歴(字源)の詳細が不明なものである。例えば、[能]や([録]などの)[录]の字形がそうで、これらは一見したところ複数の文字単位に分解できるように思われる。だが、Tなどにその根拠を見出すことは難しい。そのため、これらは1単位と見做すことにする。無論、この種のものの数が多ければ本稿の目的にも影響が出る。だが、幸いそうではない。

以上で、表Iの主要な点についての補足説明は概ね終わった感がある。それで、最後に幾つか注意を要するものに言及してこの章を終える。先に、[尚][単][營][学]などの冠(かんむり)の部分併せた(つ)が文字単位には相応しくないことを指摘した。雑多なものが入り混じっているからである。だが、この内の[營]と[学]と[譽]が代表する字形については<1文字単位：B>に加えてもいいように思われる。なぜなら、各々が旧字体の[𩇑]と[𩇑]と[與]に対応しているからである。(前二者は新字体では合併部首とも解釈できる。)

次に、[計][協]などに見られる<1文字単位：B>の[十]の字形が数字[十]<1文字単位：A>とは独立に載せられている点だが、これは単純な字形のために[九]などと違って全ての[十]が同じ文字かどうかという判断が容易ではないからある。([隼]中の[十]は他の字の省略形のようなので敢えて分ければ<B>である。)無論、どんな字形でも類似の危惧はあるわけだが、概して言えば字形が複雑になれば同一と見て差し支えない。実は[口](くち)か単なる四角形かという判断も同様で、表Iを製作に際しては細心の注意を払った。尚、表10の要素は異体字は多くなく、[甬]と[勇]の上半分、[甬]と[専]の上半分、[良]と[朗]の左側などが目立ったところである。尚、[書]の上半分を(字源的に同じであっても)[聿]の異体字とする解釈は採らない。伝統的な部首である[聿]にはそんな異体字は無いからである。また、Tなどを見る限り、この類の字例の数は僅かで、常用漢字の文字単位の総数(概数)の算出に影響する様な心配は必要なかった。尚、<2文字単位>表と<3文字単位>表も基本的には<1文字単位：B>表と同じで、例えば[否]([口](くち)と[不])に小点[丶]の字形から変化した2単位の[音](=[口]と[立])は先に述べた②に当たるといふぐあいである。

#### 四. 結 語

「漢字は一体、幾つぐらいの基本的な単位から構成されているのか。」という単純かつ重要な疑問に答えるために、対象を現行日本文の常用漢字の集合に絞って実際に調べてみた。これには二つの意味があって、一つはローマ字の[a]や[z]に様な基本的な(文字)単位は漢字集合にはどのくらいあるのかということであり、もう一つは各個別の漢字(語と言い換えてもいい)は凡そ幾つの(文字)単位の組み合わせによって造られているのかということである。その内、後者の答えは次の表に示されている。

文字単位数	1	2	3	4	総計字数
常用漢字数	374	1088	430	53	1945

<参考>平均：2.1(文字単位/常用漢字)

一方、前者の答えは表9と表10にほぼ示されている。即ち、表9の176種類と表10の264種類(A)と185種類(B)の計625種類がほぼその総てである。ただ、実際にはそれより少し多くなるだろう。というのは、表Iで[/ /]や[ / ]で表現した複数単位文字の内の一部のものの構成要素を加える必要があるからである。ただ、これらの字形は必ずしも一意に定まらない傾向がある。例えば、[尋]では単純な小図形である[エ]や[ロ]を[ヨ]と[寸]の何れに付随させるかによって、具体的な1文字単位の字形が変わるからである。だが、幸いなこと



に本当に自由度の高いものは実際にはそう多くないため、結局は650種類程の組合せで1945の漢字が表現できる。

ところで、対象とする文字集合の要素数を変えたらどうなるのだろうか。実は文字数を常用漢字より（大幅に）増やしてもこの数にあまり変化は見られないようである。少なくとも、（表9と表10の要素数を併せた）625種類に関してはそう言っていいたいだろう<sup>(40)</sup>。これに対し、文字単位数の度数分布表の方は文字数の増加に伴って全体に増加する傾向を示すようである。尤も、文字単位の種類がほぼ決まっているのであれば、要素を新たに付け加えるより外に漢字の数を増やす道が無いから当然とも言える。以上で目的もひとまず達成されたので、「漢字集合論の試み」と題する稿を終わる。

<注>

- (1) 例えば、日本の漢和辞典では五十音順（音訓索引）を、また現代漢語（中国語）の辞典ではアルファベット順を併用している。
- (2) 拙論（1994）参照。
- (3) 例えば、ギリシャ小文字は語中の位置によって字形が異なるシグマを一つと数えるか否かで文字数に違いが出る。また、日本の仮名は（今だに「五十音」と通称されているにも拘らず）文字数は50とはかなり異なる。
- (4) 赤塚、阿部（1980）による。また、この辞書を選んだ理由の一つはたまたま手元にあったことである。尚、ワープロ用の漢字は異体字も含めて6000余字（JISの第1、第2水準共に3000字程度）である。また、両者は部首の取り方も基本的には『康熙字典』に従っている点で同じである。尚、本稿では日本の漢字に関することは基本的にこの辞書に依る。
- (5) 愛知大学（1971）による。そこには7876字挙がっている。
- (6) 語言学院（1986）の編纂説明（第Ⅹ頁）と表七（pp.1299-1388）によれば、調査対象となった180万字に及ぶ全資料の99%は2418種の漢字からなり、残りの1%弱が2156種であるという。（尚、そこに使用された全漢字4574（＝2418+2156）字は（注4）で触れた日本文のワープロ用漢字に似た役割の『信息交換用漢字編碼字符集－基本集』の6763字の第1、第2級字にはほぼ対応するとのことである。）
- (7) 詳細は拙論（1994）にあるが、本稿でも要点の説明を繰り返すので、必ずしもそれを参照する必要は無い。
- (8) 本稿で言及した辞書の内、「文字数」の記述があったのは日本人の手になるものだけであった。これが偶然なのか否かについては今のところ確たる意見はない。ただ、漢語の漢字について言えば語数と文字数を併記する実際面での必要性はあまり高くない。
- (9) 声調符号〔ˊ〕の位置は編集技術上の理由で前方に移動した。以下も同じ。
- (10) 尤も、これらは日本語での読みが同じ（中国語では皆違う）であるから、英文の例は〔sea〕と〔see〕や〔no〕と〔know〕の方が適切かもしれない。一方、〔購〕と〔講〕より〔裁〕と〔栽〕の方がいいと言う向きもあろう。いずれも本質的なことではない。
- (11) 例えば、〔式〕は（〔工〕ではなく）音符である〔弋〕の部首に分類されているが、この〔弋〕を文字単位と見做すことは当然可能である。
- (12) 現行の日本文には漢字だけからなる文は無いと言ってよいから、常用漢字と当用漢字の集合にどれほ

どの違いがあるかという問題は残るが、ここではその趣旨を簡体字の場合に近づけて常用漢字表を利用した。尚、常用漢字では字形の改変基準も統一的に適用されている。(例えば(しめすへん)は、常用漢字以外では「祇」の様に「示」だが、常用漢字では「社」の様に全て「ネ」である。)尚、「常用漢字表(本表)」「内閣告示・内閣訓令」とその前文(国語審議会答申)は共に昭和56年のものである。

(13) (1)は主な基準を字形に措いているようで、同一文字の異体字や新旧両字体がしばしば別々に分類されている。また、(1)(2)両者の関係については、単純な数え方の違い(例えば、(1)が最大値で、(2)が最小値)の問題と見るのが的を得ているように思われる。尚、これは日本式の新字体が増えて、従来の『康熙字典』式の部首では検字がやりにくくなったことが原因とのことである。

(14) 対象は常用漢字字形である。また、以下の作業(の確認)には別の辞書等を使っても基本的には差し支えない。そのためあって、この辞書にある部首の一覧表は掲載しない。尚、部首の日本語名はこの辞書中のものを適宜使用した。

(15) 議論の要のあるものの幾つかは本文の後方で扱ってある。

(16) 単独字形を項目の代表に採用したので旧字体が混じっている。そこで、部首の通称名も併記した。また、異体字の有無に関する表3と表4の区別はそんなに厳密にはしていない。尚、議論の要のあるものの幾つかは本文の後方で触れた。また、補1と補2での「単独の文字」は複合文字の構成部分に使わないことを必ずしも意味しない。

(17) 現在では単独文字での使用がほぼ皆無なため、次の様して補2に入れることもできる。即ち、  
「乚」など:4画→3画:「通」など

(18) 以下では「印刷上の便宜」(JIS水準の漢字表に無い)という技術的な理由もあって、異体字形の提示は例をもって替える。

(19) 単独字「互」には「𠂇」という異体字もある。尚、「𠂇」については本文の後の箇所を参照されたい。

(20) 「𠂇」「𠂈」;「爰」「𠂉」;「𠂊」;「𠂋」;「𠂌」;「𠂍」;は常用漢字ではない。

(21) 表3に「𠂎」(はこがまえ)を挙げたのは便宜的である。正確には、(はこがまえ)でも(かくしがまえ)のいずれでもない。また、基本的には同様のことが表3中の(つくえ)と(かぜかんむり)、(すいしょう)と(またかんむり)、表2中の(もんがまえ)と(とうがまえ)の場合にも当て嵌まる。これら表6の(3)の範疇の異体字の理解に、表音文字(音価)と表意文字(意味)の対比という観点を持ち込めば、複数の機能を持つ文字が示唆的である。こういう例は割に広く見られ、例えば字形「h」はフランス文では無音と有音(音価)を、中国の壮文では音価とアクセント(声調)を表す。

(22) 「王」→「玉」の部首、「才」→「手」の部首にそれぞれ繰り込んである。

(23) 確かに、辞書には「門」「闕」「闕」「闕」が載っていて数的には問題だが、「門」を「門」の旧字体と知っている使用者が少なくないという現実を考慮した。尚、「𠂏」と「𠂐」の部首の合併については本文の後方で触れる。

(24) 「𠂑」の「𠂒」を除外した字形は「長」の非単独字形用の異体字(旧字体)である。尚、「𠂑」の字形を持つ例が(20例程度)と「長」の字形数を上回る程多いことも独立の部首とされた原因であろう。この点は(ふきながし)にも当て嵌まる。

(25) 部首の付帯説明は分かりにくい。(3)と(4)の要素が混在しているように受け取れる。

(26) <赤塚,阿部1980>では、象形(「木」)に対する象形指事(「本」)の様に、用語が幾らか変えてあるが、基本的にはこう見てよい。尚、会意と形声にも会意形声がある。

(27) 拙論(1992)で曾て20種類まで数えたことがある。そこには符号の具体的な形なども挙げてある。尚、そこでは実際にアンセント(声調)などを表しているものは外した。

(28) (2)では、不純物や異物の割合が(ただ少ないというだけで)・・・%以下ならいい、という具体的な数

- 値基準の欠如を指す。尚、(3)は例えば〔β〕系と〔B〕系の字形を同一系の字形と見るか見ないかということで、字形認識の面が強い問題である。
- (29) 不純物の割合が少し変化するだけである。
- (30) 表音文字に於いても、単純でない字形の例がないわけではない。筆者が曾て調べた中に、〔e〕や〔工〕(Hの回転形)の様な通常の文字と同じ字形のものがあった。
- (31) 藤堂(1981)によれば、〔舌〕の〔干〕も部首〔干〕と意味的に繋がっていたようである。無論、判断の決定的な要因ではないが、幸いではある。
- (32) 例えば、「(たつ)〔立〕に(ひ)〔日〕を書けば(おと)〔音〕となる。」とはよく聞く言い方だが、「(つち)に(あし)で(はしる)〔走〕」とはあまり聞かない。尚、一般的に言えば部首の通称名は漢字の認識・記憶方法と関係があるように見える。例えば、元来が「人の頭部」を意味する〔頁〕は〔貝〕(かい)に似ているためか大貝(おおがい)と呼ばれ、「言う」の〔曰〕に(ひらび)の名がある。
- (33) 藤堂(1981)には象形だとの説明がある。
- (34) 例え、分けられて、〔巴〕の部首があったとしても〔皮〕の類で1単位である。
- (35) 〔虎〕と〔虍〕の単独字形は意味的にはほとんど差がないのが特徴である。無論、常用漢字に限れば、(〔虍〕を異体字にして)〔虎〕を表4に入れる分類も可能である。尚、この表は必ずしも網羅的ではない。
- (36) 筆者は仕事柄よく遭遇するが、〔水〕と(さんずい)と(したみず)が同じ文字であるという類の説明は非漢字圏の日本語学習者にとっては理解の範囲を越えている。
- (37) 〔大〕+〔羊〕の〔奎〕→(〔達〕の)〔𪛗〕を始めとして類例は少なくない。
- (38) (分かり易い新・旧字体の例に即して言えば)〔雜〕や〔𪛗〕が3単位なのは〔九〕が旧字体の〔𠂔〕(〔亦〕の古字)に対応しているためであり、〔𪛗〕が3単位なのも旧字体〔婁〕の上半分(母,中)が〔米〕に対応しているためである。ただ、省略字形が常に既存の漢字と同じ(酷似した)字形を採るとは限らないことは言うまでもない。〔穴〕+〔火〕(+〔又〕)の〔𤇀〕→〔𤇁〕(1単位)、はその好例で、この場合は〔𤇁〕が既存の漢字に無いために〔𤇁〕は2単位となる。(〔网〕の異体字と〔木〕と〔手〕の3単位と見るのは字源の関係からすると難しい。)
- (39) 〔降〕+〔生〕→〔隆〕,〔𪛗〕+〔又〕→(〔侵〕の)〔𪛗〕,も同類であろう。
- (40) 実際、(収録字数7300字程度の)〈赤塚・阿部1980〉を調べた限りではそうだった。

<参考文献>

- (1)鹿島英一(1994)「漢字圏の文字の構造」『東北大学言語学論集』第3号,49-64.
- (2)赤塚忠,阿部吉雄編(1980)『漢和辞典』旺文社,東京.
- (3)愛知大学編(1971)『中日大辞典』燎原,東京.
- (4)諸橋轍次(1960)『大漢和辞典』大修館書店,東京.
- (5)中国社会科学院語言研究所編(1983)『現代漢語詞典』第二版,新華書店,北京.
- (6)北京語言学院語言教学研究所編著(1986)『現代漢語頻率詞典』新華書店,北京.
- (7)方毅,傅運森主編(1947)『辭源—正統編合訂本—』第十五版,商務印書館.
- (8)文化庁編(1991)『公用文の書き表わし方の基準(資料集)』(増補版),東京.
- (9)藤堂明保(1981)『漢字語源辞典』学燈社,東京.
- (10)鹿島英一(1992)「文字の類似関係と型分類—ラテン系文字の場合—」『東北大学文学部日本語科論集』第2号,25-39.

(長崎大学 助教授)